
クラウ・ソラスの輝き

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラウ・ソラスの輝き

【Nコード】

N1463U

【作者名】

河野　　宇

【あらすじ】

＊選んだ道に後悔はない。天国なんかに興味もない。

戦う意味、傷つく意味……教えてくれたのは——『永遠』を持つ傭兵。

小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

*秘めたるもの

「ベリルのケチ！」

少年はソファの背もたれをパコパコと小刻みに叩いた。重厚な革のソファとそれに見合った落ち着いた色のソファカバーが揺れる。

「……」

そんな少年に呆れて青年は小さく溜息を吐き出した。

「お前にはまだ早い」

「早くないもん！」

少年は背中まで伸ばしたシルヴァブロンドの髪を後ろで束ね丸い赤茶色の瞳が可愛い顔立ちを引き立てている。

16歳の少年は不満げにソファに足を組んで腰掛けている25歳ほどの青年を見つめた。金色のショートヘアにエメラルドの瞳は切れ長で整った容姿は女性を魅了するだろう。

少年の名はダグラス・リンデンロープ。青年の名はベリル・レジデント。ここはオーストラリア、ダーウィンにあるベリルの自宅だ。オーストラリア連邦ノーザンテリトリー準州の首府。オーストラリア大陸北側のチモール海沿いに位置している街である。

乾季と雨季を持つ熱帯気候帯であるダーウィン。そして今は7月の乾季、気温は最も涼しい季節。

逆に雨季ともなるとサイクロンと季節風による雨が降り、降水量の最も多い時期である12月から3月には激しい雷雨が発生する事が多く、湿度は70%を超える。彼はオーストラリアに自宅を置き休暇にはよくここを利用している。いにしえの精霊が宿る大地。先住民族アボリジニたちの大地だ。

さて、この2人が揉めている理由それは――

「僕もバックサイドホルスターがいい！」

「ヒップホルスターが不満か」

ハンドガンを収めるケースについて揉めていた。

「そんなもの……」と思うかもしれないがホルスターはとても重要だ。

自分に合ったケースを選ぶ事は使用時に『いかに素早く取り出せるか』につながる。刀を収める鞘さやだと考えれば、その重要性は容易に想像出来るだろう。

物騒な会話だがベリルは傭兵でありダグラスはその弟子なのだ。青年の現在の年齢は51歳。耳を疑いたくなるが彼は確かに51歳である。

25歳の時に『不老不死』になったため外見が25歳のままというあり得ない存在が彼——ベリル・レジデント。

当然、公になればとんでもない騒動になる。しかし彼は傭兵という裏の世界に身を置く者であるため、彼の存在は『公然の秘密』としてまことしやかに広まっているという訳だ。

因みに『バックサイドホルスター』というのはグリップ底部が上方を向いていて、銃身が地面と平行もしくはそれに近い角度になるようにベルト背面部に装着するケースの事。

ヒップホルスターは腰の周囲に装着するケース。装着位置のバリエーションは豊富だ。バックサイドホルスターはヒップホルスターの一種なのだが、慣れない者が扱うには多少の辛さを要する。

ダグラスが彼の弟子になったのにはそれなりの経緯がある……彼の父親もまた傭兵だったが実は本当の父親ではなく母親が誘惑した数いる者の中の子どもであった。

その名はクリア・セシエル。彼は『流浪の天使』と呼ばれるハンターだった。当てもなく旅をし、その容姿もあいまってその名が付いたハンターだ。

ハンターとは指名手配犯や、依頼により指定された相手を捕まえて引き渡す者の事。依頼内容によっては、死体を引き渡す事も……自分の子ではないと気付いた父、ハミル・リンデンローブはダグ

ラスと妻への憎しみと同時に、不死であるベリルに妬みを抱く。

それは自身が末期癌で死ぬ事を定められた事からの憎悪——15歳のダグラスをベリルの元に寄こし、少年の死と彼の名声の失墜を計画した。

しかしそれは失敗に終り両親を失った少年は晴れてベリルの弟子となったのだ。本当の父であるセシエルは55歳、ダグラスが13歳の時に他界している。

彼の名誉のためにも言っておきたいが、クリア・セシエルはアイシャがハミルの妻だと知っていた訳ではない。

旅先で偶然に出会い一夜を共にしただけである。強い男が好きだったアイシャは、彼がウワサの『流浪の天使』だと知り誘惑した。彼もいっぱしの男だ、美女に誘惑されればつい誘いに乗ってしまっても仕方がない。

まさか子どもが出来ていたなんて知ったら驚いただろう。何せ彼は、彼女から「子どもの出来ない体なの」と嘘をつかれていたのだから。

結局、その悪い癖が夫のハミルの怒りを買ってアイシャはハミルの手によって殺される事になるのだが……かつては名のある傭兵だったハミルも最後は失意のどん底で死を迎える事となった。

「他に方法は無かったのか……？」

それを思う度にベリルは眉をひそめる。こんな終り方で良いハズがない。そんな死に方を望むなど！唇を噛みしめる。

そうして行く当てのないダグラスを引き取り、少年にセシエルの面影を垣間見た。

ベリルとセシエルは強い絆で結ばれた盟友だった——たった2度の出会いだったがその絆は今ダグラスに受け継がれている。

少年を弟子にして1年が経とうとしていた。

ベリルは時折ダグラスを見て目を細める。16歳の少年の姿はセシエルによく似ているためだ。年を追うごとに、さらにセシエルに

似てくるだろう。

「……」

性格はかなり違ってそうだが……とダグラスを視界に捉え目を据わらせた。

凄惨な過去があるとは思えない。それを言ったら自分もそうか……などと苦笑いを浮かべる。

誰が信じられるだろうか、彼が『人工生命体』だなどと——決して明かしてはならない真実……51年前、A国の遺伝子研究施設で彼は生まれた。否……造られた。

ヨーロッパにある小国、正式名称アルカヴァリユシア・ルセタの国家機密クラス遺伝子操作研究施設で誕生した。

人の胎内を介さずに人間を造り出そうという研究……ほぼ全ての人種のDNAが集められ、分裂・合成・結合の結果ベリルは生まれた。

『実験No.6666。俗称キメラ』

物心ついた時にはそれを聞かされ、彼はそれを素直に受け入れた。そんな彼が何故ここに傭兵としていられるのか——ベリルが15歳の時、施設が何者かの手によって襲撃を受けたのだ。

それを計画したのは1人の言語学者だった。ベリルを手に入れるために傭兵を雇い施設にいた300人を皆殺しにした。

彼を世界の支配者にするために……しかし彼は施設にいた人々の命を賭けた行動で無事に逃げる事が出来た。

そうして出会った人物が『カイル』という名の傭兵で彼はベリルの全てを受け入れ弟子にした。

大きな事故が元でベリルが17歳の時、引退を余儀なくされたが死ぬまで彼はベリルの良き理解者だった。

彼の影響でベリルもオーストラリアが気に入ったほど彼はベリルにとって大きな存在なのだ。

何せ施設から出て『初めに会った知らない外の人間』なのだから。

それが傭兵であるカイルだというのだから「持って生まれた強運」としか言いようがない。カイルの引退により、ベリルは18歳で独り立ちするハメになってしまった訳だが……元々のずば抜けた戦闘センスが彼をすぐに有名にした。

18歳で独り立ちし20歳で『素晴らしき傭兵』と呼ばれるまでになった。それも51歳になった今、懐かしい思い出だ。

もちろんベリルの正体をダグラスは知らないし、これからも少年にそれを語ることは無い。セシエルには話してしまったが彼はもうこの世にはいない。

そもそもダグラスはベリルに会うまで不死である事も知らなかったのだ……それも仕方がない。その時、少年はただ父の影響で傭兵に憧れベリルという存在に憧れていたただけなのだから。

ベリルの弟子として1年ダグラスは本当の父であるセシエルの事を聞いて多少、悩んでいた時期もあった。

父と同じハンターの道を歩むべきか傭兵になるべきか……ベリルと対面する前、育ての親であるハミルも傭兵だった事から傭兵に憧れベリルという人物に憧れていた。

両方を天秤にかけた時、やはり傭兵としての自分を思い浮かべる。ハンターだったけど傭兵も時々はこなしていたと聞いたし……そうして少年は安直に「傭兵でいいか」と結論づけた。

ダグラスは今ベリルの装備しているものに興味をひかれている。少しは傭兵の世界に慣れてきて彼の真似をしたくなる年頃なのだ。

しかし彼はまだ弟子になって1年——ベリルのような抜群の戦闘センスを誰もが持っている訳でもない。

素質は充分だが経験が伴っていない。ベリルのような熟練者の真似をした処で何の勉強にもなりはしないのだ。

自分らしい動きを見いだせなくなる可能性もある。

「……」

ベリルは最近のダグラスに溜息をつく事が多くなった。

『早く役に立ちたい』

それが見て取れる。気持ちは解るが焦っても仕方がない。

「ベリルの弟子」という事で本人も多少のプレッシャーがあるのだろう。彼が受ける依頼のほとんどは内戦で取り残された住民の救出だ。

決して戦い自体に加わる事はしない。

『戦いでしか救えない命がある』

そのために自分は傭兵として存在している。それが彼の意志だ……内戦だけでなくテロリストに人質にされた者の救出や時には個人の護衛などもこなしている。

『不死』という存在のため、多くの組織からも狙われている。

今まで何度、狙われ捕らえられてきただろうか……その不死を解明し我が者にするために彼は捕らえられ多くの実験を受けてきた。

中には非人道的なものもあったが、彼は今も人を憎む事なく救い続けている。

* 着信

「！」

バックポケットに仕舞われているベリルの携帯が震えて着信を伝えた。

「なんだ……うむ。解った」

「依頼？」

携帯を仕舞う姿を見つめてダグラスが問いかけた。

「ガードの仕事だ」

「！ へえ」

立ち上がり準備を始める。護衛の仕事は軽い装備でよいための準備も早い。

ダグラスは黒のパンツに水色のシャツにグレーのベスト。ベリルはソフトジーンズに白のシャツ、青い前開きのシャツを羽織っている。

移動しながらダグラスに詳細を説明する。オレンジレッドのピッケアップトラックはシドニーを指摘した。

ベリルのような傭兵には仕事を仲介する人間が数人ついている。

中には直接、携帯にかけてくる者もいるが大抵は仲介役を間に挟む。

「脅迫状？」

眉をひそめる少年に頷き説明を続けた。

護衛の相手はミーナ・マクスウェル15歳。父親は大手外資系の社長を務めている。その父の会社とある企業の買収を計画しているのだが先日、脅迫状が自宅に届けられた。

「その企業を買収したら娘を殺す？ だったら犯人すぐ捕まるんじゃないの？」

「そう思っていたようだが、特定出来ずに捜査は難航しているらしい」

社員50人というIT系の会社らしいのだが、全員を洗ってもめばしい人物が浮上してこない。

「で、その間の護衛を依頼してきたって訳だね」

ダグラスが解ったように相づちを打つ。丁度ベリルがダーウィンで休暇を取っていたため紹介屋はベリルを紹介しモリス・マクスウェルに仲介屋を教えた。

間に紹介屋やら仲介屋からが挟まって面倒にも思えるが信用と信頼のためには多少は必要な事でもある。

『危険な職業』というのも理由の1つだ。特にベリルに至っては……ではあるが。

「その会社の買収を止める。とかは出来ないの？」

「買収の話を持ちかけたのは相手からだ」

「へ……そうなの？」

経営がおぼつかなくなり、今の内に買収された方が会社のためでもある。「社員全てをそのまま雇用する」という条件で話は進められていた。

「あれ？ だったら全然、問題ないじゃない」

「何か事情があるのかもしれない」

しかし『脅迫』という方法はいただけない。

「単なる勘違いなんじゃないの？」

ダグラスが薄笑いで発した。

確かにそういう事もあり得る。犯人の脅迫理由が掴めない今、あらゆる方向を推察し考慮していく事が重要だ。

とはいえベリルたちの仕事は護衛であって捜査ではない。そこらは警察に任せる事にしてシドニーに向かう。

ダーウィンからシドニーまで、およそ4000kmの旅は車で1日以上かかる。ダグラスもベリルも旅は好きであるためこの道程を大いに楽しむ事が出来た。

車で移動するのは自分の車があった方が何かと便利だからだ。途中で給油を行いシドニーに到着する。

同国最大の世界都市——オーストラリア南東部に位置するニュー
サウスウェールズ州の州都シドニー。

世界遺産のオペラハウスを臨む世界で最も美しいといわれる都市
のひとつである。夜ともなれば幻想的な夜景を海から眺める事が出
来る。

ベリルたちは1軒の家の前に車を駐めた。芝生の整った、よくあ
る現代建築の家だ。

「……」

呼び鈴を押すと少し長い時間、待たされた。

「……どなた？」

ドアの向こうに気配を感じたあと女性の声が少し震えているよう
に聞こえた。

「護衛を頼まれてた者です」

ベリルは小さく笑い気さくな態度を見せる。

「……」

その様子にダグラスは苦笑いを浮かべた。ベリルが気を遣ってい
る事が可笑しかったのだ。

相手に警戒されないためとはいえ、こんなベリルもたまにはいい
かな……と思う。

「本当に……？」

「はい、本当です」

ダグラスがベリルの横でニコリと笑って発した。174?のベリ
ルに身長が近付きつつある。

セシエルから受け継いだ『天使の微笑み』は絶大な効果を発揮し
たようで、女性は静かに入り口を開く。

子どもが一緒だという事も相手の警戒心を和らげた理由の1つな
のだろう。

女性は40代ほどで、年に見合った花柄のワンピースを着ている。
背中までのブロンドは緩いカール、薄手のカーティガンを羽織って
いる。

「！」

ドアを開いた女性は息を呑む。ベリルの姿はアイスコープを覗いた時よりも鮮烈に目に飛び込んできた。

強烈な存在感……とでも言おうか。

「……」

ダグラスは見慣れた光景に頭をポリポリとかいた。

男女を問わずベリルの持つ独特の雰囲気と整った容姿に一瞬、喉を詰まらせる。女性は特に惹かれてしまう。

「ベリルです。こっちがダグラス」

「！ あ、ああ。リサよ、入って」

握手を交わし家の中に案内される。整頓された室内が2人を出迎えるリビングのソファに促された。

ベリルが室内を見回すとガードの1人と目が合う。リビングに1人という事は外に2人ほどか？ と視線を外しながら推測する。

常時、ガードを雇っているのは当然だが脅迫状の件で娘に専属の護衛を雇いたいという事だろう。

「娘さんは」

「部屋にいるわ」

リサに指で示されダグラスが向かう。女性は少し戸惑ったがベリルが軽く手で制止した。

「同じ年代同士でまず馴染んだ方が良い」

「そ、そうですね……」

女性は見事なブロンドをかきあげ飲み物をベリルの前に差し出した。

「主人はまだ会社なの」

「いつ帰られますか」

「2、3時間もすれば帰ってくると思うわ」

ベリルはタイミングを見計らっていた。こういう丁寧な物言いは慣れていない、そういった意味でも彼が護衛の仕事を受ける事はまだ。

ダグラスは2階にあがり、ここだろうと思うドアをノックした。

「ミーナ？」

「誰？」

ドアの向こうから聞こえる女の子の声は少し怯えているようだ。

「僕、ダグ。君の護衛で来たよ」

すると、ドアの鍵が開かれ隙間が出来た。

相手を驚かせないようにゆっくりと開き笑顔を見せたあと部屋に入る。

「あなたが……あたしのガード？」

同じような年齢のダグラスに少女は驚いて問いかけた。

母親ゆずりの綺麗なブロンドに青く大きな瞳に小さな鼻と形の良い唇。淡い水色のシャツに、膝よりもやや短めのフレアスカート。

「……っ」

ダグラスは言葉を一瞬、詰まらせた。

「正確に言えば僕の師匠が君のガードだけだね」

「師匠？」

少女が首をかしげる。そのしぐさがたまらなく可愛く見えた。

「僕はまだ弟子なんだ。傭兵の」

「！傭兵？ ガードじゃないの？」

顔に見合った可愛い声で問いかける。その目は好奇心に満ちていた。

傭兵を目にするのは初めてなのだろう、おおよそ彼女のイメージ

とは真逆に位置しているベリルを見た時の彼女の顔が思い浮かんで

ダグラスは心の中で笑った。

「じゃあ、後で下に来て。紹介するから」

「うん。わかった」

可愛い子だな……ダグラスは素直にそう思った。

ま、ベリルは何の反応も示さないんだろうけど……と、薄く笑う。彼の側にいて恋愛感情とかそっち方面にはとんでもなく鈍い。とい

う事を知った。

あれだけの容姿なら数人の女性をはべらしていてもいいだろうに

……

16歳の少年が考えるような事ではないような気がしなくてもないが一緒に暮らし始めた当初、ダグラスはそう思っていた。

まあ、ちよつと背は低い気はするけど……もうしばらくしたら僕、追い越しちゃうもんね。などとし鼻を鳴らす。

「……」

2階から降りてくるダグラスを視界に捉えベリルはグラスに手を伸ばした。アイスティーの入れられた透明のグラスがカランと小さく音を立てて氷が傾く。

「どうだ」

「降りてくるって」

言いながら隣に腰掛けて前に置かれているグラスを手取る。リサはクツキーを皿に乗せベリルの前に置き、向かいのソファに腰を落とした。

「お気遣い無く」

ダグラスが応える。ベリルがこういう事は苦手だと知っているから自分が応対するようにしていた。彼がまともに応えたら逆に相手が気を遣ってしまうからだ。

どうせ「うむ」とか言うだけで愛想笑いなんかもしないんだもん。相手は「何か気に入らない事でもあるんだろうか……」って気にするじゃないか。

そうこうしているうちにミーナが降りてきた。

* 対面

「ミーナ、紹介するわね。こちらがベリルさん、そちらは知ってるわね」

ベリルとダグラスは立ち上がり握手を交わす。

「ホントに……傭兵？」

予想通りミーナの顔は驚きに満ちていた。

「うん、本当」

ダグラスが笑顔で応える。

「……」

ミーナはニコリと笑ったベリルに頬を染める。

「犯人が捕まるまでお願い出来るかしら？」

リサが心配そうに問いかけた。

「あまり長い期間は難しい」

「長期の契約はしないんだ」

「大丈夫よママ！ きつとすぐ犯人は捕まるわ」

気を落とした母親を元気づけようとミーナが笑う。

「我々も出来る限りの事はしよう」

ベリルの言葉にリサは少し笑顔を見せた。

ミーナを警護するために今日から泊まり込みになるため空いている部屋を借り、ベリルは衣類などを買いに車に乗り込んだ。

* 苛立ち

「いい男は得だよねえ」

助手席でダグラスがぼそりと言った。

「なんの話だ」

「なんでもない」

眉をひそめる彼に少年はシートベルトを締めながらプイとそっぽを向いた。

店の多い通りまで来て路肩に車を駐め、ダグは衣料品店にベリルは路地裏に入っていく。狭い路地裏にその店はひっそりとそこにあった。

「……」

重たい引き戸を開き奥にいる老婆に目を合わせる。置かれているのは大小のネジ。

「何が欲しいんだい」

馴染みの客のように口を開いた。

「9ミリ・パラベラム弾を2箱」

器用に結った白髪交じりのブロンドの老婆は、それを聞くとカウンターの奥から紙箱を2つ取り出した。

「振り込みだね？」

「後で振り込んでおく」

ここは知る者の少ない武器の店。もちろん、ちゃんと正規のルートで仕入れているまともな店だ。信用のおける相手（常連）にしか物を売らないというのがこの店のルール。

路地裏を出るとダグラスも店から出てくる処だった。

袋を後部座席に積めてベリルのカードを返す。エメラルドの色をしたドラゴンのホログラムが入ったカードは彼専用のカードだが、少額ならダグラスも使えるように設定してある。

車に乗り込むと携帯をいじり先ほどの代金を振り込む。彼はあまり金銭を持たない。チップ用の紙幣を10枚ほどポケットに潜り込ませている程度である。

海外ではカードがメインでカードは『信用』にもつながるからだ。9ミリ・パラベラム弾とは彼ら2人が主に使用するハンドガンの銃弾だ。^{カートリッジ}カートリッジが無ければ銃などただの鈍器に過ぎない。

そうして買い物を済ませマクスウェル家に戻った。

「やあ、遅くなってすまない」

戻るとモリス・マクスウェルが帰宅していた。ブラウンの髪に薄い青の瞳で気さくに笑いかけベリルに手を差し出す。

ベリルよりもやや低い背だが肉厚な体型に年の頃は50歳ほど。藍色のスーツがよく似合い『成功者』としての貫禄が窺える。

やはり彼もベリルの容姿に少々、驚いた目をした。

彼らは知らない……ベリルが不死だという事を——今回の件に関して告白する事柄でもない判断したからだが『表の人間』に大々的に暴露するものでもない。

出来れば隠しておきたいのも事実だ。

「今回の事には参っているのだ」

リビングでモリスは頭を抱えた。家族の、しかも大切な娘をターゲットに脅迫してきた事で彼もリサも疲れ切っていた。

契約の破棄も考えたが彼が断ればその会社は倒産を余儀なくされ社員たちが失業に追い込まれてしまうらしい。

「脅迫状が来たのっていつ？」

「2週間ほど前だ」

ダグラスの質問に溜息混じりに答える。

「予告日とかは書いてないの？」

「書いていればとづくにどうにかしている……」

顔をしかめてモリスは発した。本物は警察が持っているのでコピーをベリルに手渡す。

『警告――』

今やろうとしている買収をすぐに止める。

でなければお前の娘がどうなるか、解ってるだろう。

これは警告だ。脅しだけだと思うな、必ず実行する。』

「……」

ベリルは眉をひそめる。文字はパソコンで打たれたものだろうと推測出来る。印刷状態などからプリンタとパソコンの特定は出来るかもしれないが……犯人の絞り込みという部分では難しいと思われるた。

あまりにも相手の掴め無さに、むしろ恐怖心だけがかき立てられ今に至っている。

「確かにおかしな内容だ」

「どこがおかしいの？」

コピーを返しながら発した彼にダグラスが首をかしげる。

「敵対的買収ではない事柄にあまりにも攻撃的だ。そうでない事は調べればすぐに解るだろうに」

「怒りすぎて勘違いしてる事に気が付いてないんじゃないの？」

「その可能性もある」

「ダゲ、手伝って」

キッチンからミーナの声がして少年はベリルを一瞥しキッチンに向かった。

「何？」

「この皿、ここに置いて」

皿をあごで示す。ミーナはオープンからローストチキンを取り出した。

「何これ」

「あなたたちの歓迎会よ」

ミーナはローストチキンの飾り付けをしながら答える。

「歓迎会……？」

「だって、しばらくここにいるんでしょ？」

「そりやそうだけど……その主役に手伝わせるワケ？」

「あら、あなたは弟子だから主役はベリルじゃない」

しれっと応えられピクリと指を動かす。

歩くフェロモンめ……ダグラスは喉の奥で舌打ちした。そこにいるだけで自覚無く女を口説く『ベリル』という存在に少年は多少の苛立ちを覚える。

「言っとくけど……」

「何？」

「ベリルって恋愛感情、皆無だよ」

「え？」

「！？」

しまった！ つい余計な事を言っちゃった……とダグラスは少女から視線を外した。

「……」

そんな様子のダグラスをしばらく見つめて少女はプツと吹き出す。

「アハハ！　もしかして何か勘違いしてる？」

「え？」

「あたし、彼のこと別に気にしてないわ」

口に手を当てるコロコロと笑うミーナの顔を凝視する。

「……そうなんだ」

「そりゃあ、初めは『いいな』って思ったけど。なんていうか、近寄りがたい感じがするじゃない？」

「ん……まあ」

「あたしには『凄く遠い人』かな」

ミーナの言葉にダグラスは何故かホツとした。

「ママはもつと接近したいようだけど」

「え……」

再び驚いた顔をしたダグラスにミーナがまた吹き出す。

「驚いた？」

「……なんだよ」

苦笑いを返すが彼にとっては冗談では済まない話だ。本気で不倫を考えていた女性も今までに存在したのだから。

もつとも、ベリルを相手にそれも成立するハズがない。少年の言うように彼には恋愛感情が欠如している。道德觀念の固まりのような人物に見える事だろう。

外見のイメージとは違った態度に少しがっかりする者もいる。どんなイメージを持っているのか疑問ではあるが。

「そっちは何？」

「ミートローフよ」

ダグラスは絶句した。おおよそ、自分が食べてきたものとは形が違っている。

「作り方……は知ってるよね」

「そのレシピ見て作ったわ」

レシピ通りに作ったとは思えない。彼が見てきた料理とはほど遠い見た目ばかりだ。

「……何よその顔」

「い、いや〜なんでもない」

当惑した顔のダグラスにミーナは睨みを利かせた。

「見た目は悪いけど味は最高なんですからね！」

ツンツと頭を横に向けた。

「ごめんごめん。さ、続き手伝うよ」

「あ、次はケーキ。彼は甘いモノとか嫌い？」

「さあ〜どうだろ。僕が好きだから時々、作ってくれるけど」

「！ 作ってくれる？」

「あ……うん」

しまった、また余計な事を言っちゃったぞ……ダグラスは困って頭をかいた。

「もしかして……料理得意？」

「あーうん。まあまあ」

ミナの手が止まって少年はどつしたものと悩んだ。

*小さな痛み

「あ！ そうだ。何か教えて欲しい料理とかない？ ベリル教え方上手いから教わるといいよ」

「え……？ オレンジムースが上手く出来ないけど」

「じゃあ連れてくるね。他の料理は隠しておいて」

パタパタとキッチンから出て行くダグラスの後ろ姿を見送りミナはローストチキンや他の料理を隠した。

「オレンジムース……？」

「うん。ミナが教えてほしいって」

ソファで足を組み、雑誌に目を通していたベリルに声をかける。

「……」

どういったいきさつで料理の話になったのだ？ その経緯が気にはなるが……と笑顔のダグラスに顔をしかめる。

ベリルは小さく溜息を吐きながら立ち上がった。

キッチンに入るとミナがニコニコして待っていた。ひと通りの準備は済ませているようだ。

ミナに近付き準備している材料を見回す。

「コアントローは？」

「あ！ ……っとコレ！」

出し忘れて慌てて棚から出す。コアントローとはフランス産のリキュールの1つだ。ムースではなく上に乗せるオレンジゼリーに使う。

「では卵白と卵黄を分けてくれないかね」

「わかった」

「お前は板ゼラチンを水に浸してくれ」

「了解」

手際よく、よく通る声がキッチンに響く。ミーナはレシピも見ないで的確に分量を計るベリルに感嘆した。

ムースが完成し冷蔵庫で固める間にオレンジゼリーを作る。そして固まったムースの上に乗せて再び固めれば完成だ。

「ウフフ……完成が楽しみ」

少女は冷蔵庫に入れて嬉しそうに笑った。

「！」

冷蔵庫にもたれかかって喜ぶミーナのエプロンに付いている汚れにベリルは目を留める。そして声を出さずに笑った。

「今夜が楽しみだな」

言ってリビングに戻る背中に「うん！」と少女が元気よく応える。そんなベリルの表情を見ていたダグラスは手で顔を覆った。

「……」

気付かれたな……

ベリルに隠し事は難しい。色恋沙汰にはとことん“うとい”くせに、ちよつとした隠し事はすぐに気付かれてしまう。

学校で『親にサプライズプレゼントを試みよう』というものがあつた時も彼はすぐに気付いた。

もちろんベリルは気付かないフリをしてくれていたが「気付かないハズがない！」と問い詰めたところ気付いていた事を白状した。

自分も訊かなきゃいいのに、わざわざ訊くものだからベリルも答えなければ仕方がない。

ベリルの弟子をしているが、ダグラスはまだ16歳。「学校には行くように」と彼に言われて通っている。

その学力の高さ故、学校側も彼を自由にさせている処がある。そういう訳で今の彼は『仕事につき休学中』だ。

と、いつでも全ての仕事に連れていってくれる訳じゃない。あまり危険な仕事は留守番になる。

ミーナはというと、家庭教師がついているのでしばらくは学校に行かなくても大丈夫である。本人にその気は無いがベリルが教える

事も可能だ。

天才的な頭脳——先天的か後天的なものなのか定かではないが、施設にいた頃は彼の才能に気付いたA国が専門的なほぼ全てのものを学ばせていた。

戦闘における知識もその中に組み込まれていた。

10歳から武器や兵法について学び、15歳の襲撃はその知識のおかげで逃げおおせた。

『全てが謎めいている』

傭兵の間で不思議に思われるのも当然だろう。

しかし、この世界にいる者の多くは過去を語りたがらない。だからあえて訊く者はいないのだ。

もちろん訊かれたとしても答える訳は無い。

「……」

よく飽きないな……てか暇にならないのか？ 僕なんかあんなにじつとしてられないよ……とダグラスはじつとリビングで雑誌を見ているベリルを眺めた。

ベリルが読んでいるのは科学の専門雑誌だ、新しい論文を読んでいる。時には小さく唸ったりつぶやいたりを繰り返している。

科学は常に発展し新たな発見がある。自分の持つ知識が古くなっていく事をよく知っている彼は、そうして自分から知識を吸収していくのだ。

元々ベリルは勉強が嫌いではない。

「ダグ、庭にテーブル置いて」

「！ 庭？ だめだよ」

「どうして？」

聞き返すミーナに呆れたように発する。

「君は狙われてるんだよ。どこから撃たれるか解らないのに外にいるなんてだめだよ」

「！ そか……」

そういえば、いつもは庭でゴルフの素振りをしているパパがここ

最近は家の中にずっといる。

「食堂を飾ればいい。リビングからは見えないし、こっちに来ないようにすれば見つからないよ」

しょんぼりしたミーナを励ますようにダグラスは声を張り上げた。

「……」

ドン！ と目の前に置かれたジュースの瓶にベリルは眉をひそめる。

「喉乾いたらこれ飲んでね」

言ってダグラスはすぐにキッチンに消えた。その残像を追いつユースの瓶に目を移す。

つまり「当分キッチンの方には来るな」という事か……とベリルは理解して、また雑誌に視線を戻した。

「面白いものを読んでいるな」

モリスがベリルの雑誌をのぞき込んだ。書斎で仕事をしていたがいち段落してテレビを見に来たらしい。

「腹が減ったな」

言いながらキッチンに向かう。

「！ パパ！ もう少し待って」

食堂で準備をしていたミーナが父を両手で止める。

「おお、言っていた歓迎会というやつか？ すまんすまん」

笑って引き返した。キッチンと食堂は続きになっている。キッチンに行くには食堂を通らなければならないのだ。

リビングに戻ったモリスはテーブルに置いてあるジュースを手にとった。ベリルと目があってお互い苦笑いを交わす。

「準備出来たわ！」

「2人を呼んで来るわね」

リサが言ってリビングに足を向けた。

「2人とも、夕食よ」

「ようやくか」

モリスが立ち上がり続いてベリルもゆっくり立ち上がる。

「ベリル！ こっち！」

ミーナがベリルの腕に手を回し席に促した。

「！」

ダグラスはなんとなく気に入らなくてムスツとベリルの隣に座る。

「？ 何か気に入らない事でも」

「別にっ」

訳が分からずベリルは首をかしげる。一同は席に着きミーナが立ち上がった。

「これから2人に護ってもらうあたしから、ささやかな気持ちです。よろしく願います」

少女は言って腰掛けた。

「さ、切り分けるわね」

リサがナイフを持って立ち上がりローストチキンを切り分け始めた。

「これあたしが作ったんだよ！」

「ほう」

褒めるようにベリルは目を細める。

「ミートローフは？」

「！ あ、あれは……」

ダグラスの言葉にミーナは目を泳がせた。

「！」

ダグラスはその様子に自分が言った事を気にしているのだと少し胸が痛む。ベリルはそんな2人を一瞥しミーナに微笑む。

「ミートローフか。いただくっ」

「でも……っ」

「これね」

リサが冷蔵庫からミートローフを取り出して慌てたミーナだがベリルの柔らかな表情に言葉を詰まらせた。

形のいびつなミートローフを見ても彼は何も言わずに切り分けられた皿を受け取る。口に運ばれるミートローフを息も出来ずに目で追った。

「……」

上品に口に含むベリルをじっと見つめる。

「良い味だ」

ベリルがニコリと笑う。

「本当、美味しいわ」

リサがその後続いた。

「ホントに！？ 良かったあ」

安堵して椅子の背もたれに体を預けた。

食事を楽しんだあと、オレンジムースをリビングに運びそこで食べる事になった。テレビを見ながら笑い合う家族団らんの風景――

「……」

少年はその光景に少し胸が痛かった。かつての楽しかった記憶が脳裏を過ぎる。

まだ父さんが自分を血のつながった子どもだと思っていたとき、そこには確かに愛があった。笑顔で囲む食卓。優しい父と母の笑顔……それはもう戻ってこない。

殺されかけたけど憎む事なんて出来ない。愛してくれていたから。「！？」

誰かに背中をポンと叩かれて振り返るとベリルがそこにいた。黙って優しく背中を叩いて片付けを手伝うためキッチンに消えていく。いつも彼の優しさが胸を軽くしてくれる。たったこれだけの事がダグラスには嬉しかった。

「……っ」

涙が出そうなのをこらえてオレンジムースをかきこんだ。

* 道具は道具

少年は少年なりに必死にここまで来た。父親のハミルに拒絶され、自分はこの世にいてはならない存在なのだと認識したときベリルはそれを激しく否定した。

『それを決めるのは誰でも無い自分自身だ。お前が自ら決めていかなばならぬ事なのだ……』

愁いを帯びたエメラルドの瞳がダグラスを捉え抱きしめた。その温もりを今でも覚えている。

いつか彼の見た目を追い越してしまうけれど……死ぬまできっとベリルは『父さん』だ。

ここに来る前にホルスターの事で言い合いになったけど、より良く使うためにはベリルの言うことの方が正しいんだ。

『どんな物も人を殺す道具に成り得る』

ベリルの言葉を思い出す。

『全ての物は使う者次第で命を奪うものにも救うものにも成り得るのだ。それを知らなければ道を誤る事になる』

日常にある身近なものだって人を殺す武器になる。目に見えない言葉にだってその力はある。

ベリルは時に自分すら盾に使う。

死なないから……だけど痛みや苦しみは僕たちとなに1つ変わらない。

* 胸の奥の志

逆に言えば『死ねない』んだ。死ぬような痛みや苦しみに遭ってもベリルは死ぬ事が出来ない。

きっと何度もそんな痛みや苦しみを味わってきたと思う。それでも生き続けなければいけないんだ。

ベリルは感情の起伏があまり無い。涙を流した処も見つた事がない。でも、その方が辛いと僕は思う。

ベリルの腕の中で、男の子が息絶えた事があった。

彼はしゃがみ込み両膝をついてその子を強く抱きしめた。そして、人形のような目で地面をじっと見つめていたのを覚えてる。

内戦で取り残された村の救助に向かったけれど間に合わなくてベリルは悔しげに空を見上げた。

心の中で彼は泣いていたんじゃないだろうか……はき出せない感情に苦しんでいたんじゃないだろうか。

『どうやっても救えない命がある』

それが現実——それでも己の出来る限りをしようとする。時には不死である自分の体さえも使って……

僕はベリルに憧れている。全ての物を人を活かす武器と成せる力を持つ彼に少しでも近づきたい。しかしダグラスは疑問に思っていた。

何故そこまで自分を犠牲に出来るのか……

ベリルは己の存在を良しとは思っていない。

だが、自分を造り出した科学者たちと命を賭して逃がしてくれた人たちのために自ら死を求める事はなかった。

研究施設の中でも彼の正体を知っている者はごくわずかだった。彼に専門知識を教えていた学者たちは「天才少年」だと国から聞かされていたからだ。

『ベリル・レジデント』という名は、科学者たちが付けた名だ。ベリルとは緑柱石から作られる宝石の総称。そして緑は悪魔の色とされる。

『レジデント』は“居住者”を意味し——それは「悪魔の器」という意味となる。科学者たちはそう名付けながらも、彼にどんな未来を思い描いていたのだろうか。

自分たちのした事に酷く後悔したのかもしれない。それでも……自分たちのした事は正しかったのだ。と思いたかったのかも……ない。

施設にいた頃、人間の生活を学ぶうえで中継カメラの映像を眺めていた。そこにいるであろう人々、笑顔、死——ディスプレイ越しに映される世界。現実が存在しているのに決して触れる事の出来ない向こう側の命……淡々と流される風景を彼は無表情で見つめていた。その心の奥に彼は何を抱いていたのだろうか。

自分が傭兵になる事をベリルは本当は快く思っていない事を知っている。

傭兵たちは口を揃えてこう言うのだ。

『人殺しに代わりはない。正義なんて思っちゃいけない』

だが、誰かがその罪を背負わなければならないのなら……俺たちがその役になればいい。ベリルの仲間たちは強い志で戦場を駆け抜ける。

僕は天国なんかに興味はない。だけど、天国に行く人たちのために僕は傭兵になりたい。その笑顔を護りたい。

もちろん、全ての傭兵がそうじゃない事だって解ってる。中にはベリルと敵対する傭兵もいるのだから。

どうして傭兵の世界に入ったのかを訊いた事があった。

「それが適正だと判断したからだ」と彼は答えた。

その言葉には、どれほどの重みがあるのだろう。

「いつか私を必要としない時代が来る事を願っているよ」

静かにつぶやくように発する。

追いつきたいけど追いつけない……その大きな背中を僕はずっと見つめていくんだろう。目指すものは大きすぎるけど、それも悪くない。

その夜――ベリルは庭に出て星空を見上げていた。

「ベリル」

呼んだ少年に顔を向ける。エメラルドの瞳が曇る事無くその輝きを放っていた。異様ともいえる輝きだが、初めのうちは驚いていたダグラスももう慣れた。

レンジャーとしての才能も持つベリルはこうしてよく大気を探る肌で予兆と予感を感じ取るうとする。

「少し見回る。お前はもう寝ろ」

「解った」

2階の寝室に向かうダグラスの背中を見送り家の周りをゆっくりと回った。裕福な家庭の平均的な敷地面積。嫌な気配は無い。

「……ふむ」

異常が無いか確認し夜警にひと声かけて寝室に向かった。

ダグラスとベリルは同室だ。すでにベッドに潜り込んでいる少年の寝顔を一瞥し、反対側にあるもう1つのベッドに体を滑り込ませる。

「おやすみ」

小さく発して目を閉じた。

次の日、ずっと家にこもりきりも良くないという事でみんなでフランス料理店に行く事になった。

ベリルはサングラスをかけ、いつもの軽装ではなく少し紳士的な恰好だ。ダグラスも同様にカジュアルなものではない。

モリスは濃いグレーのスーツを着こなし、リサとミーナはエレガントなドレスに身を包み鮮やかなスカーフを肩に羽織っている。

「……」

ダグラスはそんなミーナをじっと見つめた。15歳の少女がとても大人びて見える。

車までの短い距離をベリルとダグラス、他の警護も周りを警戒した。

「お姉ちゃん」

「あら、ニール」

およそ150?の少年が笑顔でミーナに近寄ってきた。10歳くらいだろうか、バーリーウッド（黄土色よりもやや茶色）の短髪に黄緑の瞳が見上げる。

少年は少女の目の前に来ると照れたような表情を浮かべた。

「これからお出かけ？」

「え？ うん、そうよ」

それを聞いた少年はにつこりと微笑んだ。

「そか。じゃあいつてらっしやい」

手を振るニールに同じように応え、黒いリムジンがゆっくりと発進した。その後ろには警護の車がびたりとついている。

「今の子は？」とダグラス。

「隣の子よ。ニールっていうの」

「仲がよいのかね？」

「ミーナをとても慕っているの」

リサが小さく笑って応える。

「いつもミーナの後ろをくついて歩いていたな」

それにモリスが付け加えた。

予約しているフランス料理店に到着し、ベリルとダグラスはミーナを挟むようにして店内へ……静かな店内。落ち着いた音楽とナイフやフォークが立てる小さな食事の音に上品な笑い声。間接照明が質の良い店を引き立てていた。

荷物とコートを預け番号札を受け取る。マクスウェル家の人たち

を壁際に、両端に警護が腰掛けた。

ベリルたちはフロア内に背中を向ける事になるが、目視での警戒は警護たちに任せベリルは背中で気配を探る。

素早く動けるようにするための位置だ。ダグラスは慣れたものでメニユーを呑気に眺めている。

背中に目でも付いているんじゃないだろうかと思うほどに、ベリルの反応は素晴らしいのだ。

「このコース料理でどうかしら」

リサが提案し皆がそれに頷いた。

「……」

ナプキンを移動させるベリルの動きにリサとモリスが目を見失った。

違和感なく上品な動き、そしてワインを訊きに來たソムリエにも完璧な対応を見せ一同を感嘆させた。

順序よく運ばれてくる料理にミーナは笑顔を浮かべる。ナイフやフォークはフランス料理では外側から使っていく。

「君は本当に傭兵かね？」

店を出たモリスがベリルに問いかけた。ベリルはそれに苦笑いを返す。

「ニールという少年とはよく話を？」

家路へ向かう車内でミーナに問いかけた。

「ええ、色んなお話をするわ」

「10歳くらいだよ」

ダグラスの質問にミーナが頷く。

「弟妹のようだな」

ベリルが微笑む。

「うん。弟みたい」

それに応えるように少女もニコリと笑った。

「ミハエル捜査官を——つむ、少し訊きたい事があってね。指紋は……そうか。送ってくれ」

マクスウェル家に到着して着替えながら携帯をかける。通話を切り着替えを済ませると携帯が振動した。

画像は脅迫状に付いていた指紋を映したものだ。青は家族や親類、赤は雇っているガードのもの。と色で示してくれている。

「ふむ……」

「どんなの？」

ダグラスが横からのぞき込む。

「どう？」

問いかけたダグラスに目を向けず思案した。疑っているのもすまない気持ちだが、内部に犯人がいる事も想定している。

「……」

ベリルは脅迫状の画像を見つめて眉をひそめた。

指紋はそれ以外、検出されなかったようだが手袋を使用して手にした人物がいた事が出ている。

小さく溜息を漏らし携帯を閉じた。

「付き合ってくれんかね？」

その夜、モリスがブランデーの瓶とグラスを2つ持ちリビングで腰掛けているベリルに示した。

酒が嫌いではない彼は快く受ける。ダグラスとミーナはリサとキッチンでお菓子作りを手伝っていた。

「いやはや、多感な年頃でね」

キッチンを一瞥しモリスが苦笑いを浮かべてつぶやいた。同じ年頃のダグラスを連れているベリルにどこか共感したのだろう。

「私の真似をしたがる」

「ミーナも母親の真似をしたがるよ」

モリスは大きく頷いて発した。

大人の真似をしたいのは理解するがベリルたちの場合はそれが命

取りにもなる。

『家庭の何気ない会話』では済まされない。

ダグラスもそれを解ってはいても背伸びしたくなる。憧れている人物が大きいからこそ少しでも早く近づきたいと思う。

その感情がはやるあまり反抗もしてしまう……

* 少年の過ち

「へえ、ベリルってそんなに凄いの？」

明日の料理の下準備を手伝いながらミーナが問いかけた。

「うん、仲間たちからは『素晴らしき傭兵』って呼ばれてるんだ」

照れながらも誇らしげにダグラスは語った。その手にはパプリカお菓子作りを終えて、ミートローフの“おさらい”をしているのだ。気をつける処をベリルに聞いて明日、お披露目である。

次のミートローフは夏向けの爽やかなものにしようとパプリカを持ち出したミーナ。それをダグラスに切ってもらっている。

「若いのに凄いんだ」

「あ、うん……」

本当は51歳なんだけど……まあ、20歳で名が広まったらしいから間違いではないよね。などと思いながら2つめのパプリカを切り始める。

「何か基本とかあるの？」

「え？ うーん……」

手を止めて考える。

「ああ、携帯電話は絶対に着信音を鳴らすなって言われてる。あと僕たちの携帯には必ずGPSがついてて……」

「あたしのにもついてるよ」

「だろうね」

父親とベリルはリビングでくつろいでいた。

「傭兵、という仕事は大変かね？」

「！」

おもむろに質問したモリスに一瞬、目を合わせたあと視線を外す。そして苦笑いを浮かべた。

「そうだな……仕事の内容によってかなり変動する」

ベリルに来る依頼は重要度と難易度の高いものが多い。彼が不死だからというよりもその成功率によるものだ。

「君は不思議な男だ」

「！」

グラスを傾けたあとモリスは柔らかな眼差しで宙を見つめた。

「ミーナのあんな笑顔は久しぶりだよ」

脅迫状のあと警護を増やしても彼女の怯えは消えることはなかった。

「君が来てくれてミーナは元の表情を取り戻した」

「……」

ベリルは目を細め、手に持つグラスに注がれている琥珀色の液体に視線を揺らし小さく笑った。

「ダグラスのおかげだろう」

同じ年代のダグラスが少女から緊張感を取り除いた。

「おお、あの子は成長したらさぞ聡明になるだろう。どうだね？」

ミーナの婿に

「はっはっはっ……」

ベリルは乾いた笑みで返す。

「君もまだ若いのだから、恋人の1人くらいはいるだろう」

ベリルはそれに少し困った表情を浮かべた。

「パパ！ そんなこと聞いたら失礼よ」

下準備を終えたミーナがリビングに戻ってきた。その手にはソーダゼリー、後ろからダグラスがジュースを運んでくる。

「これはすまない」

「いや」

苦笑いでブランデーを口に含む。

「大体、この朴念仁ぼくねんじんに恋人なんている訳ないよ」

「悪かったね」

しれっと応えたダグラスに顔をしかめる。

「えーそう？ とってもステキだけど」

「それとこれとは別の問題」

ミーナの言葉にダグラスはゼリーをスプーンですくい口に投げ込みながら発した。当惑したベリルの顔を一瞥し勝ち誇った表情を浮かべる。

ベリルに勝てるチャンスはほとんど無い。ささやかな勝機を見逃しては一生、勝てないかもしれない。どんな勝ちだつて取つていくのだ！ と、ダグラスは心に決めていた。

「お酒つて美味しい？」

少女は首をかしげて2人のグラスを交互に見やった。

「……そうだな。飲む理由は様々だ」

「ミーナもいつか解るさ」

「ふーん……？」

夜も更けて皆はベッドに潜り込む。

「ベリルはどんな理由で飲んでるの？」

ベッドの中でダグラスが小さく問いかけた。

「さあ……何かな」

装備している銃をナイトテーブルに仕舞い、寝る準備をしながらぼそりと応える。

「何それ」

ダグラスは眉をひそめた。ベリルの酒を飲んでいる姿はよく見るけれど、何を考えているのかは解らない。

楽しいのか、寂しいのか悲しいのか。それとも……？

「好きなんだよ。それだけだ」

ダグラスに笑顔を見せベッドに体を預けた。

「……」

ダグラスはそんなベリルの背中を見つめる。

ベリルの考えている事はいつも解らない。思考をめぐらせても掴めない……一歩でも近づきたいのに、それがとても歯がゆかった。

「……」

背後からの視線にベリルは目を据わらせる。

理由を訊かれても「好きだから」としか応えられん……そこには重い感情も何も無い。

「！」

ふと気付く。

そういえばカイルが好きだったな。彼はウイスキーを好んでいたが……と吹き出しそうになった。彼に数多く影響されていた事にくづくだと笑いがこみ上がる。

硬い黒髪と空のような青い瞳。ベリルの全てを受け止め、静かに見守ってくれていた。口数は少なめだったが発せられる言葉には力があつた。

そんな昔を思いつつベリルは意識を遠ざけた。

「！」

朝——ベリルの携帯が振動する。

リビングに向かう階段を下りながら通話ボタンを押した。相手はミハエル捜査官だ。ミハエル捜査官とは旧知の仲で、彼がまだ小さな街の警官だった頃から友人関係である。

35歳でイタリア人の妻と6歳になる息子がいる。

「！……そうか。ありがとう」

通話を切りリビングに入ると隣のニールがミーナと遊んでいた。

「あ、ベリル」

手を振るミーナに笑顔で返す。そしてニールに目線を合わせるように片膝を付いた。

「ニール」

「なに？」

積み木を手に持ち笑顔を向けた。

「パソコンはいじれるな？」

「うん」

「ベリル……？」

なんでそんな事を訊くの？ ミーナは少し不安になる。

「アレを書いたのは君だな」

「……」

「！？ ベリル！ なんてこと言うのっ」

ミーナは驚いて立ち上がった。ニールは黙って下を向いている。

「怖がらなくてよい。怒りはしない」

「…… ホント？」

「！ ニール？」

ニールをソファに促し隣に腰掛けた。

「！」

その様子を降りてきたダグラスが見て、ソファの後ろに立つ。

「…… お姉ちゃんが、最近お父さんと一緒にいられないって」

少年は一同の顔を窺いながら少しずつ語り始めた。

「買収のせいだって…… 言ってたから」

テレビでよく見る脅迫状を真似て出したら、早めに家に帰ってくるようになった。

「それで『やった！』って思ったの」

しかし、ミーナの表情が暗くなって行きどうしたらいいのか解らなくて黙っていた。

「！ だから、あんな内容だったのか」

ダグラスが納得したように声を上げる。

「あたしのためにやってくれたのね」

「ごめんなさい……」

肩をすくませて小さくなる。ベリルはその肩に手を置いてささやくように発した。

「相手のために想うのは良い事だ。だが考えて行動しなくてはな」

「…… うん」

反省している少年の頭をポンと優しく叩き立ち上がった。

「私から言ってあげよう」

「ホント！？」

「ちゃんと隣にいるのだぞ」

「うん！」

ベリルはまずモリスとリサに説明をしニールがその隣でペコリと頭を下げる。次にミハエルに連絡して彼が駆けつけると同じように説明してニールが謝った。

「なんで解ったの……？」

ひと段落終えてダグラスが訊ねた。ベリルは笑みを浮かべて応える。

「違和感があると言ったろう。文面だけなら頭の悪いバカか知能犯に思えるが、観点を換えれば子どもだと推察出来た」

そしてニールと初めて対面した時の彼の表情をベリルは見逃さなかった。

「……」

ダグラスはあつけにとられる。ニールの表情なんか気にして見てなかった。

『どこに真実が隠されているか解らない』

ベリルがいつも言っていた言葉……常に冷静でいなければ判断を誤る。瞬時の判断が要される世界にあつてそれをないがしろには出来ない。

傭兵は集団戦闘がメインだ、少しの判断ミスが己だけでなく仲間を命を危険にさらす事になるのだから……ベリルは特にそれを考える。死ぬ事の無い自分に仲間が巻き込まれる事を最も嫌うからだ。

「ありがとう」

「僕は何もしてないけどね」

ミーナの礼にダグラスは苦笑いを浮かべた。彼女は笑顔で首を横に振る。

「ううん、側にいてくれたから安心出来たもの」

「だったら良かった」

「代金は振り込みでいいのだね？」

モリスがベリルと握手を交わし問いかけると小さく頷く。

「今回は割引させてもらう」

「それは助かるよ」

*さよならの意識

そうして警察車両にもたれかかっているミハエル捜査官にベリルは軽く手を挙げ、ピックアップトラックに乗り込んだ。

「ね、メールとかしていい？」

助手席に乗り込もうとした少年に問いかける。

「えっ？ うん、いいけど」

電話番号とメールアドレスを交換して助手席に腰を落とし車はゆっくり発進する。遠ざかるミーナたちに窓から身を乗り出し手を振った。

「はあ……」

見えなくなつてシートに体を預けて運転しているベリルの横顔を一瞥し「ベリルは失恋とか、無いんだろ？」ぼそりとつぶやいて外に目を向ける。

別に失恋という訳でもないが、どのみち実らない恋だという事は解っている。そういった意味では失恋ではあるのだ。

「失礼な。私にだって一度くらいは」

「あるの！？」

ガバツ！ と上半身を起こしベリルを見やる。

「……どうだったかな」

「なんだよそれ……」

ガツクリと肩を落として再び外を眺める様子にクスツと笑った。

* 索敵・さくてき・

あれを『失恋』というべきか……ベリルはフロントガラスから見える空を視界にかすめる。

A国、遺伝研究所にいたときピアノの教師をしていたアリシアは20歳も年の離れていたベリルに恋をした。

そして襲撃のあったあの日……銃弾を胸に浴び命を落とす。

最後の記憶は血の味の口づけ——恋愛感情のないベリルでも、それがどういふ事なのか理解出来た。冷たくなっていく体をどうする事も出来ない。その苦しみがベリルの心を締め付けた。

彼女が生き残ったとしてもその恋が成就したかは解らない。

ただ思う……あの時の、命が消えゆく感覚に例えようもない孤独感が自身を襲った。全身をゆるゆると支配していく虚無感は慣れるものじゃない。

叫びたくなる声も突いて出る事は無く、冷たくなっていく体を抱きしめる他に為す術も無い。

その度に彼は奥歯を強く噛みしめる。そんな感覚をダグラスには味わって欲しくないというのも、ベリルが彼を傭兵にしたくない理由の1つだ。

それでも少年はベリルの背中を追いかける。

「！」

ベリルは携帯が震えている事に気付いた。それを車のカーナビの前にある凹みに開いて差し入れ通話ボタンを押す。

傭兵の一部にはこうした特殊な機械を使用している者も少なくはない。半ば道楽でそういった開発を手がけて流している会社も多い。「どうした」

<ベリル！ 戻ってきてくれ！>

先ほど別れたミハエル捜査官の大声が車内に響いた。

「なんかあったの？」

尋常ではない様子にダグラスも気になって聞き返す。

<ニールが連れ去られた>

「！」

ダグラスとベリルは互いに顔を見合わせ車を反転させた。

「なんで隣のニールが……？」

ダグラスは首をかしげる。一体、何があったのだろうか。

「ベリル！」

戻ってきた車に手を振るミハエル。青みがかった金髪にグレーの瞳。身長は178?で外見は30代ほどか。深い緑のスーツを着こなしている。

芝生の上にはマクスウェル家の人々と、見慣れない男性が1人……

2人は車から降りて話を聞くために歩み寄った。

「何があった」

「ニールを助けて！」

ミーナがベリルにすがりつく。

「まず説明してよ」

ダグラスがミーナをなだめて説明を促した。

ベリルたちが去ったあとミーナとニールは久しぶりに外で遊ぼうと玄関を出た。

その時——いきなり知らない男たちがニールを抱きかかえ車に連れ込んだ。それを見ていたニールの父、ディエゴが慌てて出てきたが男たちは父親を突き飛ばしながら何かを発して走り去った。

「たっ、頼む！ ニールを助けてくれ」

ディエゴはミハエルに懇願するように震えた声を発した。

「ニールが連れ去られた理由は」

ベリルが静かに問いかけるとディエゴはビクリと体を強ばらせ、言い出しにくそうに顔を逸らす。

「どうやら原因はお前のようだな」

厳しい瞳をディエゴに向けた。

「そ……その……」

みんなに見つめられてディエゴは言葉を詰まらせる。白いタンクトップに厚手のジーンズ姿、いかにも力持ちそうな体格だ。

硬いセピア色の髪と彫りの深い顔立ちに黄色い瞳、身長は180？は軽くある。

「言えないのなら何も出来ん」

ベリルは腕を組んで冷たく発する。いつもの彼なら相手が話せるようになるまで待つのだが、今回はそうもいかない。

「おれっ……俺は、そのっ……麻薬の運び屋をやってるんだ」

「！？」

「……」

驚いた一同に、ベリルだけが冷静にディエゴを見つめていた。

「初めは金のために少しだけだったんだが……段々と量が増えてきて」

さすがに恐くなったディエゴが「運び屋を止める」と言う相手は脅迫してきた。

「いいか、お前は止められない。俺たちが止められないようにしてやるからな」

麻薬組織の下っ端が吐き捨てた言葉がまさかこんな結果になるうとは……

「組織の名は」とベリル。

「シャーク・メナス」

ディエゴは頭を抱えた。それにベリルは冷たい視線を向ける。

「己の起こした結果を十分に噛みしめろ」

言って携帯を取り出しどこかにかけはじめた。

「……ヤン、調べて欲しい組織がある。『シャーク・メナス』だ。頼む」

そうして携帯を閉じたベリルにミハエルが声をかけた。

「協力してくれるのか？」

「さてね」

携帯をパンツのバックポケットに仕舞いながらディエゴに向き直る。

「ディエゴ、私は傭兵をしている。こういう組織とも何度か戦った事がある」

「！」

「あなたは運が良い。彼がいれば大丈夫ですよ」

泣きそうな目をベリルに向けるとミハエルが付け加えた。

「保証は出来ん」

「頼む！ 助けてくれ！」

ディエゴは弱々しくベリルにしがみついた。

「それなのだが……」

「……」

次の言葉を待つ。

「私は雇われて仕事をこなす。それには契約が必要だ」

「けっ契約する！ どうすればいいんだっ？」

ベリルはそれに小さく溜息を漏らした。

「相手の組織の規模で変動する。私1人ならおよそ5000オーストラリアドルだが、仲間を要請すればそれだけ金額はかさんでいく」

「どれくらいなんだ」

モリスが横から口を挟んだ。

「規模にもよるが最低でも5人。上限はまだ決められん。私以外は1人1万だ」

「5万5000！？ そんな大金ある訳が無いっ」

頭を抱えてうなだれる。それを見たモリスがキリリとベリルを見据えた。

（作中でのレートは1オーストラリアドル＝90円）

「わしが代わりに支払おう。頼む、ニールを助けてやってくれ」

「！ モリス……」

「相手の規模によっては10万を超えるが」

モリスはそれに少し驚いた顔をした。

「今回は戦闘になる可能性がある。その金額だと思ってくれ。ああ……」

言ったあとに思いついたように発した。

「ダグラスがプラスされるので私1人では8000だ」

「うむ……いいだろう。払ってやる」

「モリス……しかし」

確かに嬉しい申し出だが、そこまでしてもらうのは気が引けた。自業自得でもあるのだから。

「デイエゴ、同じ子を持つ親として心配なのはよく解る。わしも娘が連れ去られたらと思うと……」

「すまない……すまない」

「1つ提案がある」

ベリルは右手の人差し指を立てた。

「私が動かすのが警官なら料金は8000ドルだけだ」

言ってミハエルに目を移す。彼はそれに驚き苦笑いを浮かべた。

「おいおい……警察が傭兵の指揮で動くってか？」

「住民が困っているのだぞ」

「……」

ミハエルは携帯を手にした。

「あ、部長。折り入ってお話が……」

電話の相手と言い合っているミハエルを横目にベリルは震えた自分の携帯を出して通話ボタンを押す。

電話の相手は先ほどのヤン、『情報屋』である。世界の情報を集めそれを売買している会社の1つだ。

その社員でオーストラリアの情報を仕切っている人物である。

「そうか……うむ。すまんな」

携帯を切りバックポケットに仕舞いながらミハエルを遠目に窺う。10mほど先にある乗ってきた覆面パトカーに左腕を乗せリアクション大きめに言い合っていた。

「了解、得られると思う?」

「ふむ」

ダグラスの言葉にベリルはミハエルの元に足を向ける。

「!」

ミハエルから携帯を奪い耳に当てた。

「確かホーネストだったかな」

<! 誰だ?>

「今話題の人物だよ」

<貴様がベリルか!>

「相手は『シャーク・メナス』だ。手強いぞ」

<それがどうした! 我々だけで十分だ、貴様などに手を借りる事は……>

「手柄はお前が取ればよい。私ならば最高の手柄をお前に与えてやる」

<! ……>

相手はしばらく黙り込む。ベリルはそれを目を据わらせてジッと待った。

<保証出来るか?>

低く、くぐもった声で問いかける。

「約束しよう」

<必要な人数を後で連絡しろ>

切られた携帯をミハエルに投げ渡しモリスたちの処に戻る。そのあとを慌ててミハエルが追いかけた。

「奴らの拠点はキャンベルタウンだ。中規模程度の組織だろう」

「! 結構デカイじゃん」

「今回は警官を動かす。あまり無茶な事は出来んな」

「ヘッドセットは用意するの?」

手慣れた2人の会話に事は着々と進んでいた。

「ホーネストにキャンベルの街警察に協力の要請を」

ベリルはピックアップトラックのドアを開きながらミハエルに指

示した。2人は再び買い出しに向かう。

路肩に車を駐めるとダグラスにカードを渡した。

「見せるだけでいい。ヘッドセットを20だ」

ダグラスは無言で頷き路地裏に入っていく。その後ろ姿を見送り携帯を取り出した。

「詳細を頼む」

相手は情報屋のヤン。いま持っている情報だけでは作戦は立てられない。

「データを送ってくれ」

一通り聞いて電話を切る。数秒後、再び携帯が震えた。

「……」

送られてきたデータをカーナビに移動させ、見取り図に眉をひそめて思案するように小さく唸った。

* 第一段階

「……おじゃましまーす」

重たい引き戸を少し開け顔を覗かせる。例の老婆の店だ。皆は『ダーツ屋』と呼んでいる。

「！」

奥のカウンターでこちらを睨み付けている老婆に小さく会釈して店内に体を滑り込ませた。そして老婆の前に行きベリルのカードを見せる。

「ヘッドセットを20……」

「……あんたがベリルの弟子だね」

「え？ うん。そうだけど……」

老婆はダグラスを一瞥し、ゆっくり立ち上がってカウンターの奥に消えた。

「……？」

なんか睨まれたような……しばらく待っていると老婆が布製の小さなバッグを抱えて現れた。

「はいよ」

「ありがとう」

ダグラスの笑顔に目も向けず、老婆は小さなメモに何かを書き記して少年にぶっきらぼうに差し出す。

「？」

見ると、それには金額が示されていた。

「……」

なんだよ……言えば解るのにとダグラスは少しムツとした。

「待ちな」

「！」

バッグを持って去ろうとしたダグラスを引き留める。

「何？」

険のある物言いに老婆は鼻で笑った。

「なかなかの面構えだ。あんた、イイ男になるよ」

「へ……？」

ニヤリとされ少年はいぶかしげな表情を浮かべながら店を出た。

「！ どうした」

車で待つていたベリルに問いかけられ店での事を説明すると彼は口の端を吊り上げる。

「からかわれたのさ」

「あんのババア……」

ふるふると怒りで体を震わせるダグラスの手からカードとメモを取って携帯で金を振り込むと車を発進させた。

今度はマクスウェル家ではなく隣のデイエゴ・ウォルマート家の呼び鈴を鳴らした。その手にはノートパソコン。

「……」

ダグラスは先ほどまでいた隣の玄関を一瞥し目の前のドアに目を移す。

「変な感じ」

苦笑いで発した少年にベリルも同じように苦笑いを返した。

「どうぞ」

迎えたのはデイエゴの妻カレン。サンディブラウンの髪を後ろで束ね淡い緑の瞳は魅力的だ。

リビングに案内されると、そこにはマクスウェル家の人々もいた。彼の家ほどの広さは無いリビングにこの人数は少々、狭苦しさを感じる。

デイエゴの職業は運送会社の運転士で、実はその麻薬組織の表向きの会社が彼が務めている会社だった。

社員たちの中から数人を選び運び屋の仕事を兼任させ、断れない状況下に置かれた彼らは引き受けざるを得ない。

拒否したデイエゴが良い例だろう。しかし、ここにベリルがいた

事は相手の誤算だ。

彼がいなければデイエゴは彼らに従い麻薬の運び屋をしていただろう。現に彼は警察に助けを求めるつもりは無かった。

「さて、私が調べて解った事は……」

本題を切り出しベリルは持っていたノートパソコンを開いて一同に示す。

「彼らが所有している数ある倉庫の中にニールが捕らえられている可能性がある」

「わ！？ いつの間にこんなに調べたんだよ……」

驚くミハエルにニヤリと口の端をつり上げた。

ディスプレイに映し出されているのはキャンベルタウンの地図。

そこに赤い点がいくつか示されている。

「デイエゴ、何か気付いた事はあるか」

「……」

ベリルの問いかけにじっとディスプレイを見つめた。

「！ ここ……この倉庫」

1つの赤い点を指さす。それはキャンベルの北西に位置している郊外の倉庫だ。

「ここは特別な社員しか出入りできない倉庫なんだ」

お得意さんの荷物を預かっている倉庫なのだと聞かされていた。

「じゃあ、ここで決まりなんじゃない？」

考えているベリルにダグラスは発する。

「ニールの携帯にGPSでも付いてれば良かったんだけどねえ」

ダグラスが苦笑いを浮かべて発する。

「あ！ ニール持ってるよ！」

ミーナの声に一同は彼女に目を向けた。

「あたし、ニールにダグラスから聞いた話をしてたの」

それは傭兵がいつも注意している事についてだった。

「ああ……あの時の」

ダグラスが思い出したように声を上げるとミーナは頷いて続きを

話す。

「うん、それであたしの携帯を見せてニールがそれを持ちながら外に出たの」

そしていきなり見知らぬ男たちに掴みかかれ少年はその携帯を手にしたまま連れ去られてしまった。

「！ それを辿ればニールの居場所が解るね」

「しかし、携帯を手にとっていたら相手に奪われるんじゃないか？」

ミハエルがもつともな意見を口にするるとみんな無言になる。しかし、ベリルだけはニヤリと薄く笑った。

「お手柄だ」

「え？」

ダグラスに目を向けてベリルが発する。

「何も無いよりは情報としては役に立つ。さっそく辿ってみよう。番号は解るかね？」

「ちょ、ちよつと待ってくれ……」

ミーナのGPS番号はメモで控えてあるとモリスが携帯を取り出した。ベリルも携帯を取り出し言われた番号をそのまま誰かに伝えている。

「相手は誰だ……？」

ミハエルが怪訝な表情を浮かべた。

「秘密のお友達」

ダグラスがしれつと答える。

「は……？」

もちろん相手は情報屋のヤンだ。番号から辿れるシステムも持っている。しばらくして通話を切ったベリルがパソコンに何かを入力した。

それは――

「！」

ミハエルはその表示に驚く。そこには例の倉庫に赤い点が表示されていた。

「思いっきり倉庫だね」

「決まりだな」とミハエル。

「それで、だ」

ベリルはディエゴに視線を向けた。

「これからキャンベルに向かうが……」

「おっ、と俺も連れて行ってくれ！」

ディエゴの言葉にニヤリと笑う。彼がそう応える事を解っていた顔だ。

「あなたは留守番だ。マクスウェル家にいてくれ。決して外には出ないように」

立ち上がり妻のカレンに発する。

「……え？」

「こつちに奴らが来ないとも限らないってこと」

首をかしげた彼女にダグラスが説明した。

息子だけでなくその妻にも狙いを定める危険がある。もちろん捕らわれるという保証は無い。どちらかといえば殺される可能性の方が高いのだ。

「彼女を頼む」

「もちろんだとも！」

ベリルの言葉にモリスが胸を張った。

「こつちからも数人、家の周りに配置するよ」

ミハエルの言葉にベリルは笑顔で応えノートパソコンを閉じる。

外に出て倉庫から数百メートル離れた駐車場を集合場所にすると警官たちに伝えてくれとミハエルに指示した。

入り組んだ場所にある駐車場だ。ミハエルはそれに手を挙げて応え自分の車に向かい無線を手に取った。

それを横目にベリルとダグラスはピックアップトラックに乗り込む。

先ほど買い込んだヘッドセットを後部座席から面倒そうに助手席に引きずるダグラス。もう1つのバッグも掴み中身を確認し始めた。

ヘッドセットは常に5つほどは車に持ち込んでいる。そのうちの2つをベリルとダグラスは使用するため、少年は他のヘッドセットとリンクさせていた。

初期設定とチェックをダグラスに任せベリルは車を発進させる。

キャンベルタウン——シドニーから西に約87km、直線では南西に約53kmほどの挙にある。車で1時間少々。シドニーの衛星都市の重要な都市として機能している。

信号機にひっかかりベリルはくいとあごで示した。

「私のバッグを」

チェックを終えたダグラスがヘッドセットの入ったバッグと入れ替わりにベリルのバッグを後部座席から掴む。

中を見ると目で示されバッグの口を開くと、そこにあるのはベリルの予備の装備だ。

「……？」

と、思ったが見慣れない黒いナイロン製のショルダーホルスターも入っていた。

「調整しておけ」

「！？ 使つていいのっ？」

少年は目を輝かせホルスターを取り出した。そこに収められているのはリボルバー銃。いつも使うオートマチック拳銃とは形が異なるハンドガンだ。

* 調整

レンコンのような形をしたものが真ん中についている。そこにカートリッジを詰め込み、発射する拳銃である。

オートマチックとは違い、カートリッジの装弾数は少ないが『ジャミング』が起こっても引鉄を引けばすぐに次弾を送る事が出来る。排莢（はいきょう）はいきょう。つまり空薬莢を外に出す事（からやっきょう）がされなかったり次弾が上手く送り込まれなかったりする事をジャミング（「ジャム」という）。

リボルバーは手動で排莢を行うため、ジャミングが起こらないという訳だ。

その信頼性、そして瞬時に弾丸を放てるという速射性においてリボルバーは警官が携行している国が多い。

警らを目的としない（突然の事件には出くわさない）捜査官などはオートマチックを持つ者もいる。

『もしもの時の銃』

ベリルはそれをダグラスに渡した。少年はショルダーホルスターを装着し、自分に合うサイズに調整する。

革製のホルスターよりもある程度の体格差に対応出来る点がナイロン製は柔軟だといえる。価格においても革製品よりお手軽だ。

常備使用のものではないため、予備のカートリッジは戦闘時には持たない。といっても数発はポケットに忍ばせる事は基本だが。

* 編成

ひと足早く待ち合わせに到着したベリルとダグラスは集まるまで倉庫の見取り図を眺める。

「……」

少年はパソコンのディスプレイに眉をひそめるベリルの表情とディスプレイを交互に見つめ左側に収められているリボルバーに小さく笑う。

試射や訓練には装着を許可してくれるショルダーホルスターだが、作戦遂行時の初めての許可に胸が躍った。

その様子を横目で一瞥する。

「子どもだから」という理由で許可しなかった訳じゃない。ショルダーホルスターから繰り出される少年の動作で今まで許可しなかったのだ。

子どもが持つ『憧れ』を彼は見抜いていた。そんな意識で使用するのだから、どうしても動作はその意識に囚われてしまう。

しかし要領の良いダグラスに任せるのもいい。彼はそう考えて少年の分のホルスターも持ち歩いていた。

少年は全てを理解したうえで傭兵を目指している。それが見て取れる事で余計に慎重になっているのかもしれない……ベリルは自分の思考に思わず小さく笑いをこぼした。

1時間後——ワゴンが数台ほど駐車場に入ってきた。

暗いフィルムの貼られたフロントガラスから伝わる気配が一般車ではない事を物語っている。

2人はそれを確認すると車から出て数歩、歩いて止まった。

無造作に駐まったワゴンから暗いスーツを着た男たちが険しい表情で出てくる。最後にミハエルとディエゴ、そして見慣れない40代ほどの男性がゆっくりとその身を揺らし貫禄を持った顔でベリルに睨みを利かせた。

お互い初対面だが画像で誰だか理解している。

「あれでしょ、ホーネスト部長」

小声で発したダグラスに苦笑いで応えた。

「……」

ホーネストはベリルの前まで来て少し見下ろすその目は明らかに疑心を表していた。薄いブラウンの髪は今までの苦労が窺え、青みがかったグレーの瞳に複雑な色を見せていた。

ベリルはそれに小さく笑う。彼の心中は不安で満たされている事がその表情で丸わかりだ。

不安になるのも当然かもしれない。とても傭兵とは思えない容姿と体格は、それを連想させる要素など皆無だ。しかし、その落ち着いたき払った雰囲気と存在感は認めざるを得ない。

ホーネストはくりりと一同に向き直り声を張り上げた。

「これから彼の言葉を聞いてくれ」

言ってベリルの後ろに下がる。ベリルはそこにいる者たちを見回したあと微笑んで口を開いた。

「ベリルだ。今回、私が指揮を執^とる事になった。少々、今までとは違った動きになるかと思うがよろしく頼む」

嫌味のない物言いに、身構えていた者たちは一斉に緊張をゆるめた。

「チームを3つに分ける」

ミハエルからリストを受け取り、しばらくそれを見つめて20人いる刑事たちを6人、7人、8人にそれぞれ分けた。

「これからヘッドセットを配る。説明をよく聞いて設定してくれ」
ベリルが言うと、後ろからダグラスがバッグの口を大きく開けてチームごとに手渡していった。

みんなはそれを珍しそうに眺める。耳にすっぽりと収まるサイズのヘッドセットは最新式で市販されていない。

メタルブルーの外見に、赤・青・黄色の小さなボタンが付いている。

「初期設定は済ませてある。起動ボタンを押してくれるだけでいい」
ダグラスが起動方法を説明して、それを伝えていく。電池の使用量を減らさないために待機モードにしていたのだ。

「赤は私のみに通じる会話。青は全体の声、黄色はチームのみだ。ボタンを2つ以上押せばリセットされる。今どのモードなのか解らなくなった時はそうするように」

耳に装着すればいちいち外して色を確認してはいられない。

一同は自分の付ける側の耳に合わせてボタンの配置を覚えていった。その様子を確認しながら説明を続ける。

「パーキングの敷地をこれから攻める倉庫だと仮定する。Aは入り口をBは裏手、Cは入り口の右側にある窓を監視する」

上品な身振り手振りを加えての説明。ダグラスはその後ろ姿を眺めながら、シヨルダーホルスターのフィット感を改めて確認していた。

「倉庫の規模はかなり大きい。突入した者はいち早く設置されている物を伝えてくれ」

一度、全員を見回し小さく頷くと再び説明を始める。

「AとB同時に突入を開始する。出来るだけ音を立てずに頼む。Aは私がBはダグラスが先導する」

「えっ!？」

親指で指されたダグラスは驚いて声を上げベリルの背中を凝視する。

「彼は若いが私のやり方をよく知っている。彼の指示は私の指示だと思ってくれば良い」

「……」

そ、そこまで言う……? それって1チームを任せるって事だよね? いやちよつと待って……そりゃあベリルのサブリーダー役の人と一緒に行動して、やり方も見てたけど……と少年は呆然とした。一通りの説明を終えたベリルは現場に向かうまでの数分をここで過ごせとみんなに言っぴくアップトラックに足を向ける。

「！」

こちらに歩いてくるベリルに自然と体が強ばった。

「あつ……あの……さ」

「ん？」

後部座席からペットボトルを取り出して傾けるベリルに言い出しにくそうな顔をした。

「なんで……僕が……」

「模擬戦よりも緊張を持ち実戦よりも深刻ではないからだ」

ベリルがボトルにフタをしながら淡々と応える。

「それって……」

確認するような眼差しのダグラスにニヤリとする。

『お前の失敗では何も変わらない』

つまり……少年が何かやらかしたとしても修正が利く。だからしたいようにやれ。

彼の表情からそれを察して少年は一瞬ムツとなったがすぐに笑顔を作った。失敗しなければそれは功績となる。自分の判断で仲間がどう動くのかを見る絶好の機会なのだ。

実際の試行でなんて……と思うかもしれないが、模擬戦だけでは味わえない感覚に慣れておく事は重要だ。

よほどの危険がなければ少年を仕事に連れて行くようにしているベリルだが必ず生きて返れるという保証など無い。

「……」

嬉しそうに準備をするダグラスを見つめながらベリルは己の心の奥を探る。

私は恐いのかもしれない。彼が目の前で倒れる姿を見る事が……そうなってしまうかもしれないという恐怖に逃げようとしている。

セシエルの忘れ形見——彼が死んだと聞かされた時、自分でも驚くほど心の中では強い衝撃を受けていた。

微妙な差はあれどクリア・セシエルと同じ顔を持つダグラス。

ダグラスの死を目の当たりにした時……私はどうなる？ その意

識に自分の足下を見つめて薄く笑った。

「……？」

そんなベリルに少年は首をかしげる。ベリルは「なんでもない」というように手を示し後部座席に滑り込む。ノートパソコンを開いてこれからの事を最終確認した。

1人の男がピックアップトラックの背にもたれかかっているダグラスに近づく。

「やあ、えーとフランクだ。君のチームになる」

いぶかしげな眼差しを向けるダグラスに握手を求めた。

「ああ、どうも」

その手を握りかえし見上げた。金髪に蒼い目。30代前半と見受けられる。

「彼の事はミハエルから聞いていたが……」

と車内のベリルを一瞥する。

「！ ミハエルの友達？」

「同僚だよ」

その言葉に少年は少し身構えた。

「……どこまで聞いているの？」

「ん？ ああ……安心しろよ。『例のこと』は誰にも言っていないし、これからも言うつもりは無いから」

それを聞いてホッとする。ミハエル捜査官を信用していない訳ではないが、辺り構わずにベリルの不死をバラされてはかなわない。

「どうせ言ったって誰も信じないって」

「そういう問題じゃないよ……」

肩をすくめたフランクに顔をしかめる。

「君はいくつだい？」

「16だけど」

それに口笛を鳴らした。

「ちゃんと学校には行ってるよ」

* a l l A t t a c k - オールアタック -

「それで1チーム任されるんだ。よほど素質があるんだな」

「さあね。この作戦自体は大したこと無いし、ベリルは15歳でテロリスト相手にしたらしいよ」

「！へえ……」

感心するフランクに少年は小さく溜息を吐き出した。

もちろんその話は本人から聞いた訳じゃない。数多く語り継がれているそのうちの1つを耳にただけだ。

確かにそれは間違いではない。研究施設が襲撃され逃げた先で力イルと出会い流れて彼の仕事に加わった。

その時にベリルのおかげで救われた者がいた事も事実である。

「で、何か用事？」

「チームリーダーさんに挨拶しに来ただけだよ」

「フランク」

「！」

車の中から呼びかけられ振り返る。ベリルがディスプレイから目を外しフランクに顔を向けた。射抜くようなエメラルドの瞳に少し手が震える。

「ダグのサポートよろしく頼む」

「あ、ああ……解った」

柔らかな笑顔に変わり手の震えは止まった。

「しっかり聞いてんだな」

隣にいるダグラスに小声で発する。

「あたりまえ」

少し呆れて応える。遠ざかるフランクの後ろ姿を見つめ少年は再び小さく溜息を漏らした。

物珍しいのは仕方ないけど、不死だからって見た目は僕たちと変わらないっての。まあ女の人から見たら凄い美形に映ってるのかも

しれないけどさ……と肩をすくませる。

確かにベリルの容姿は整っているが人間離れしているというほどじゃない。ただ、その雰囲気は吞まれてしまう。

その存在感は人間離れしていると言えるかもしれない。

「……」

「どうした」

荷台に腕を置いてうなだれている少年にパソコンを閉じて窓から身を乗り出し問いかける。

「……なんでもない」

嫌な事を思い出した……男のくせにベリルに言い寄ってる奴が何人かいたつけ。そりゃ、綺麗な……とは思うよ。けどね、男だよ。

ベリルが女だったら僕だって好きになるかもしれない。親として師匠として仲間としては好きだけどね。でもそれは恋愛感情とは異なるものだ。

十数分後——ベリルたちは動き出した。時刻は午後2時を回った処。

「思っただけどさ」

ダグラスがぼそりと発する。

「特殊部隊とかでも良かったんじゃない？」

それにベリルはフツと笑って応える。

「それではホーネストに手柄が付かん。特殊部隊はいきなりは動かんよ」

「！………そか」

ニールの精神状態も考えてるんだ。長く捕らえられているのは良い状態じゃない。少しでも早く助け出してあげないと………相手がまだ気付かれていないと油断している今が絶好のアタックタイム。

大きな目で見る事と小さな目で見る事を同時に行わなければならぬ。いかに感情的な部分と客観的な部分を見分けるかは難しい。

それが出来るベリルをダグラスはしばらく見つめた。

「ガキ、大人しくしてるんだぞ」

「……」

暗い倉庫の中でニールはパイプイスに座らされていた。監視しているであろう無骨な男たち4人は小さなテーブルを囲んでポーカーをしている。

ニールはその様子を体を震わせて見つめていた。

ミーナの家から出る時に見せられた彼女の携帯——それを手にとつて開いたドアから体を完全に出したとたんに左手を掴まれた。

右手に持っていた携帯を驚いて離してしまったが、それは運良く上着のポケットの中に落ちた。

少年は怯えながらも抵抗は一切しなかった。ミーナの言葉に従っていたのだ。ダグラスと料理の下準備をしていた話を少年にもしていた。

彼はミーナに言った——

『もし捕まったら絶対に抵抗しちやだめだよ。僕たちが必ず助けに行くからさ。抵抗したら相手が逆上するかもしれないからね』

逃げ出したい気持ちを必死に抑え少年は膝の上の拳を強く握りしめた。

倉庫付近まで車を進めるとそこには警察車両が何台か駐まっていた。

制服をきた警官がパトカーの周りで倉庫を警戒している。ホーネストがキャンベルタウンの警察に協力要請したおかげだ。

もちろん倉庫からは見えない位置で待機してくれと事前に頼んでいる。

ワゴンから出てきた刑事たちにベリルが軽く手を挙げると14人ほどとダグラスがどこかに向かって駆けていった。

窓を監視する6人のCチームと、裏口から侵入するダグラスがチ

ームリーダーとなる8人のBチーム。

散っていく者たちの背中を眺めながらベリルはヘッドセットを左耳に装着した。グレーのパンツと黒いインナースーツ、上に厚手の前開きの半袖シャツを合わせた恰好だ。

『全身凶器』と云われる彼のいつもの姿である。

<C班、OKだ>

<B班も待機完了>

ヘッドセットからC班のリーダーとダグラスの声が響く。

「……」

腕時計を少し見て口を開いた。

「今から5分後に決行」

本来なら全員の時計を合わせてやるのが基本だが、今回は多少のズレは大目に見る事にした。

「……」

一同は固唾を吞んで決行を待つ。初めての傭兵との連携に緊張感
はぬぐえない。

秒針は決行の時間に近づいていく――

「……決行だ」

静かな声に全員が銃を構えて目の前にそびえる倉庫に足を進めた。
ベリルのAチームも同時に動く。A班は入り口からの侵入のため
他のチームよりも慎重に進まなければならない。

「シャーク・メナス」――表向きの会社名は「アイゼル運輸会社」
個人から企業まで幅広い荷物を請け負っている。

入り口は巨大なシャッターが上げられ仕事を示していた。

だが、どこか違和感がある……彼らの目は一様に警戒しているよ
うに思えた。関係のない者がいると厄介だと考えていたベリルだっ
たがなるほど、ここににいる者は少なからず密売には関与しているら
しい。

遠慮はいらないようだとベリルの目が輝いた。

木で出来たパレットにダンボール箱や木箱がうずたかく積まれて

いる。積みされている間隔からして相当デカイ倉庫だと窺えた。

地図で見ると実物とは多少の感覚のズレが生じる。ベリルはそれを照合し全体を推測した。

「中はもつと入り組んでいるとみた」

<ニールの位置は推測出来る？>

ダグラスの声に周りを警戒しながら思案する。

「AよりBが近い可能性がある」

<了解>

人が通る間を見計らって少しずつ侵入していく。

「……」

裏口から侵入したダグラスBチームは薄暗い倉庫内に目を懲らす。サンドカラーのカーゴパンツに白いタンクトップ。上に羽織っているのは厚手の同色のアサルトジャケット。

「ホントに入り組んでるなあ……」

ぼそりとつぶやく。

あちこちにプレハブ小屋が建てられていて、だだっ広い倉庫内を思い浮かべると危険だ。

「ベリル、ニールはどれかの小屋にいると思う？」

<……どうだろうか>

彼でもまだ計りかねているようでダグラスは天井を見上げた。

<小屋にはいないだろう>

ベリルの結論に少年は「よしっ」と仲間の足を進める。

「！？ 誰だお前ら！」

「ゲッ！？ 見つかった！」

後ろにいた仲間が見つかった。ダグラスは慌てて銃口をその男に向ける。

「！」

ヘッドセットからの銃声、見つかったか。こちらも時間の問題だな……とベリルは目を細めて先に進んだ。

「威嚇しながら進むよ！」

銃声が鳴り響く中、ダグラスは声を張り上げる。

当然、それは倉庫内全体に伝わりベリルたちのチームも見つかる事になる。

「！」

ニールと監視している男たちは銃声のする方に目を向けた。

しばらくするとあちこちから銃声が響き室内のため正確な位置が解らずに構えた武器をあちこちに向けて男たちは警戒した。

* 発揮力

「おい……一体どうなっただ？」

1人の男が不安になる。そこへライフルを構えた男が走ってきた。
「警察だ！ お前らそのガキ絶対に離すなよ」

ビクついていた男がニールに駆け寄って猫のようにTシャツの襟を掴む。男5人はそれぞれにライフルとリボルバーを構えた。

すでに囲まれている事を知りニールを人質に逃げようというのだ。まだ抵抗を見せている仲間もいるらしく銃声は止む事なく続いている。

「……」

ベリルは視界にある倉庫内を見回した。

プレハブ小屋と荷物が倉庫内を迷路にしている。両者に多数の怪我人が出ているがここまでは想定内だ。

どちらにも被害が出ないなんて事はあり得ないのだから……しかし、ベリル側に武があるのは明らかだ。

ミハエルとベリルは射撃において群を抜いている。特にベリルは死なない事も相まってか構えが堂々だ。

銃弾がかかるたび眉をひそめる。

「左右に展開」

聞いたミハエルは他の仲間 scatter するように指示した。

「C班、二手に分かれて入り口と裏口から牽制」

後ろにいる敵をそれで黙らせる。

「ダグラス散開して進め」

<了解>

周りから取り囲む気だ。

少年は手で指示をし一同は目で応えて散る。

「……」

ベリルのこの指示は……二ールが近くにいるという事を表している。

場の空気と気配を読む能力、そして兵の力を最大限に活かす能力——それこそがベリルの最大の武器だ。

それは時に、勝てない相手とでもやり合える力を持つ事もある。戦いにおいて数に勝るものは無い。だが、少数でも戦わなくてはならない状況に陥ったとき兵の力を最大限に活かせる事が勝機につながる。

誰もがベリルに憧れる理由はそこにある。双方共に被害を少なくする事。それを常に念頭に置く。

「！」

荷物の影から前を窺ったダグラスの目に映ったのは5人の男と子どもが1人。

「ベリル、いた」

<そのまま待機>

指示に従い様子を見る。男たちはかなりピリピリしているようだ。ふと銃声が止んだ……それは戦闘の終了を意味している。5人の顔がさらに強ばった。

「！」

ベリルも到着したようで15m先の積まれた木箱の側面にちらりと影が浮かぶ。

静まりかえる空間——

「！？」

その場を乱したのはベリルだった。

持っていたハンドガンを「使わない」と示しながら両手を挙げてゆっくりと相手を刺激しないように目の前に出る。

当然、男たちはベリルに銃口を向け二ールを捕らえている男は少年のこめかみ辺りに持っているハンドガン突きつける。

それに少し眉をひそめたベリルだが小さく笑ってハンドガンを地

面に投げ置いた。

「ニールを離してくれないか」

「動くな！」

緊張が走る。ダグラスは銃を仕舞って静かに指示した。

「みんな、動かないで……ベリルが注意を引いてくれてる間に僕が出る」

言っただけで背後から近づく。

「お前たちは逃げられないのだ。これ以上の抵抗は無駄だろう」

「うっ、うるせえ！」

ベリルの存在感が十分に発揮されている。彼らはベリルだけに集中して少年にはまるで気付く気配は無い。

「……」

あと5mほど、という処でダグラスの動きが止まる。どうやってニールを奪い返せばいいのか悩んだ。

このまま突進しても引鉄ひきがねを引かれたら自分だけじゃなくニールにも危険だ。

「思ったのだが……」

「なんだっ!？」

ベリルが視線を外して少し考えるしぐさをした。それにビクリと反応する。

「そういう姿は大人げないな」

「……」

言われて、なんだか自分たちが情けなくなってきた。

「!」

今だ! ダグラスは勢いよく駆けていき男の隙間から見えるニールの肩を強く掴んだ。

「!?!? なんだきさま!」

ニールを捕まえていた男が驚いて声を張り上げる。

「!」

それと同時にベリルも素早く走り寄った。

「うつ、うつ！？」

ベリルの動きに男たちは一斉に引鉄を引くがうつたえている人間の銃弾は至近距離にあって当たるはずもなく……虚しくベリルの横をかすめて地面に音を立てる。

ダグラスがニールの肩を思い切り引くとそのまま少年は後ろに倒れ込んだ。

「わっ！？」

声を上げたニールを刑事たちは急いで確保する。

ベリルから簡単な格闘術を学んでいるダグラスは男の1人に掴みかかった。持っていたリボルバーに指を滑らせる。

銃の後方にある撃鉄げきてつの間に指を挟めばいくら引鉄を引いても撃鉄は動かないので弾は発射されない。

「……っ」

大きな男を相手にするなら……合気道か！

『相手の力を己の力と成す』

即座に判断し力任せに倒そうとする男の力を受け流して地面に転がした。

「がはっ！？」

男の背中に激痛が走る。熟練者なら痛みを伴わずに転がす事が可能だが、この場合は激しい痛みに悶えてもらう。もつとも、“にわか”のダグラスにそんな芸当は出来ない。

一方ベリルは——いきなり目の前の1人に足払いをかまし倒れ込んだ相手にエルボーを喰らわせる。そのままの態勢で前に立っていた男のスネをこれでもかと蹴り飛ばした。

「いてえっ！」

思わずしゃがみ込んだ男にかかと落としをおみまいしその流れで立ち上がり、かかと落としを喰らわせた男の隣にいた奴が慌てて引鉄を引こうとしたが勢いを付けた回し蹴りでノックダウン。

「えっ……なっ？ うっ……」

あまりの鮮やかな攻撃に残った1人は何も出来ずに見入ってしまった

った。

「……」

その場にいた一同もあつけにとられる。

「まだやるかね？」

口の端をつり上げてしなやかに左手を流した。男は諦めたように銃をだらりと下げてうなだれる。

「……ふう」

溜息をついてダグラスはニールの元に歩み寄る。

「ごめんな、痛かった？」

「ううん、ありがとう」

ニコリと笑うニールの頭をやさしくなでると嬉しそうにダグラスの顔を見上げた。そしてダグラスの隣にいるベリルに目を移す。

「大事なくて良かった」

ベリルが柔らかな笑みで発すると少年も同じように笑顔で返した。

そうしてニールは刑事たちに父親の元に連れられていった。

「よくやった」

それを見送りダグラスの腕を軽く叩いてパトカーで待つディエゴの元に足を向ける。

「……」

ダグラスはその背中を見つめ苦笑いを浮かべた。

「怒られるのかと思った……」

苦笑いを浮かべたままつぶやく。

思い切った事をしたと自分でも思ったから……危険な事だと解っていてあれが最善の方法だった。

その中で的確な判断をしたダグラスに誰が怒るだろうか。

「ありがとう！ ありがとう……」

何度も頭を下げるディエゴに少しの笑みを見せ、ワゴンにもたれかかっているホーネストに近寄った。

「“一般人”の協力、感謝する」

ベリルの言葉を待つつもりもなくホーネストは言い放った。

「謝礼くらいは出るのかな」

「！」

皮肉混じりの返しに睨みを利かせ付け加えた。

「親玉の方も無事、逮捕した」

「それは良かった」

ここにいたのは全て社員だ。社長以下、役員は本社で会議中だった。何も知らない彼らは当然すんなり御用となった。

「いいか、もう余計な事はするな」

ホーネストはベリルの胸に指を指してワゴンに乗り走り去る。

「言ってくれちゃって……」

ダグラスが呆れたように遠ざかるワゴンにつぶやく。ベリルは小さく笑って一度、目を閉じた。

その時――

「ベリル」

呼ばれて振り返る。

* 始まりの傷

「！ ぐっ……」

右肩にスローイングナイフ（投げ用ナイフ）が沈む。

「ベリル！？」

少年は驚いて投げられた先に視線を投げた。

そこにいたのは無精髭を生やし厚手のカーゴパンツとミリタリージャケットに身を包んだ男だった。

草色の服がよく似合うガタイの良い40代ほどの男はベリルに下品な笑みを浮かべる。ブラウンの髪と同じ色の瞳。彫りの深い顔立ちに一重の目で見据えていた。

「……ローランド」

「！」

「丁度良い処に的^{ターゲット}があった」

「……」

血が流れる右肩を押さえながら男をじっと見つめる。

「相変わらず無駄な事してるな」

ニヤけた顔で言い放つ。

「なんだと……？」

「よせ」

身を乗り出した少年を制止してローランドに向き直り無言で見つめた。

* 進路

「……」

質問をわざとはぐらかした。何か調べてるな？

別段、彼が何かあるとそうする訳では無いのだが、1年ほど寝食を共にしてなんとなく彼の言動が理解しかけてきた。

「フーン。で、何を調べてるの？」

ニッコリと微笑む。ベリルは小さく溜息を吐き出しノートパソコンをダグラスに向けた。

「……？『シャイニー・ブレイド』？何これ」

食べながら訊ねると1本のナイフを見せた。

「！これ、ローランドが投げてきたやつじゃん。……あ」

そこには小さく何かが刻まれていた。目を懲らして見ると『シャイニー・ブレイド』の文字。

「どういう事……？」

「さてね」

ベリルは薄く笑って返されたナイフを受け取った。

普通にネット検索をすれば、出てくる文字ではある。だが、それだけではない事をベリルは知っていた。

「んで、何が出てきたの？」

「麻薬シンジケート」

「また……？」

は少しげんなりした。

「あれが関係ないとは思えん」

つまり……『シャーク・メナス』と何らかのつながりがあった？

「そう考える方が妥当だろうな」

「でも……なんでそれをベリルに」

ダグラスの言葉に彼は沈黙した。

考えている事はあるがまだ決めかねているのだろう。それを察し

て少年は食べる事に集中した。

その後、地下にある試射室に向かう。完全防音とまではいかないが、屋外には音が漏れない設計になっている。

ガラス張りの試射室の横にはトレーニングマシン。そして道場――地下は敷地全てを使って造られている。上の生活範囲（建物自体）はその半分ほど。

ほぼこのダーウィンで休暇を過ごすベリルにとってここは重要な拠点ともいえる。

近所の人からは「レイモンドさん」と彼は呼ばれていて、表札の文字は『スロウン・レイモンド』

ダグラスはその甥っ子だという事になっている。

が……独り立ちしてからずっとこの街に居を構えていると聞かされたダグラスは、一向に年を取らない彼を見て「どうして住人は特に反応を示さないのだろうか？」と疑問に思っていた。

なんだろうこの特殊な雰囲気……ダグラスは常にそう感じていた。ベリルの住んでいる周辺の住人は裏の世界に片足くらいは浸かっている。いつの間にか自然とそういう状態が形成されていた。それを知ったとき少年は納得したように笑みを浮かべた。

ベリルがどこの何者かを知っていて知らないフリをしているのだ。普通の住人として付き合っている事は驚きである。

ある意味、ここは傭兵たちが住んでも心地よいかもしれない。

あんまり集まられても困るけど……と少年はぼんやりそんな事を考えてプツと吹き出す。

じゃあ僕が誰かもみんな知ってるんじゃない。甥だなんてよくも言っただよ。

2時間ほど汗を流し少年は再び眠りについた。が――

「あつ！ 言っの忘れてた……」

朝――朝食を作っているベリルに言い忘れていた事を伝える。

「……三者面談？」

「職業について聞かれたから答えたら『親呼んで来い』って」
眉間にしわを寄せる彼にさらに付け加えた。

「……」
ベリルは頭を抱える。親として学校に行く事ではなく、彼がなんと答えたかが解るからだ。

確信犯だ……教師がどういう反応をするかを楽しんで答えたに違いない。ある意味、正しくベリルの性格を受け継いでいるともいう。普通に大学に行くで良かったのではないのか？」

「飛び級するだろ？ だから、『大学のあとはどうするんだ？』って訊かれたの」

深い溜息を吐き出すベリルに少年は笑った。

「担任の教師は女の人だからベリルなら大丈夫だって！」
行つてきまーす。とダグラスは手を振って出て行く。

「……どういう意味だ？」

残されたベリルは当惑して首をかしげた。

「ダグラス君」

「！」

廊下を歩いていたダグラスはふいに呼び止められ振り返ると、担任のレイチェルが教科書を抱えて立っていた。

ブロンドの綺麗な髪を後ろで束ね、オリーブ色の瞳は大人の女性を物語る艶つやがある。

「お父さんには話した？」

止まったダグラスにゆっくりと近づき少し見上げた。

「ああ、はい」

“お父さん”という言葉に吹き出しそうになる。

「指定してくだされば行きますよ。って言っていました」

言った記憶はない。どうせ断らない事を知っているダグラスは適当に応えておいた。

「あらそう。じゃあ2日後にどうかしら、授業が終った後に」

「解りました。伝えておきます」

「よろしくね」

ぺこりと挨拶して背中を向け、舌をチヨロリと出す。ベリルに会った時の教師の反応が楽しみだ。

確かレイチエル先生は32歳だったっけ。自分よりも若いベリルを見たらどう思うのかな？ 少年はそれを想像して口の端を吊り上げる。

「2日後？」

「うん。よろしくね」

帰ってきてリビングのソファでくつろぎながらお菓子を口に投げ入れて発した。

「……」

キッチンで夕飯の準備を進めていたベリルは聞いて手を止める。その様子を声を殺して笑った。こんなベリルは滅多に見られない。今の内に見ておかないとこれから先見られるかどうか解らない。

「！」

ああ……そうか。ダグラスはふと気が付いた。

ベリルが人からかう理由って……こういう事なのかな？ ベリルは人間が好きだ。言わなくてもそれがよく解る。

僕はレイチエル先生の反応もベリルの反応も楽しんでいるけど、それは『人間』だからだ。

相手の反応を確認するかのようにはベリルはいつも微笑んでいた。

「そか……そうなんだね」

それに気付いたときダグラスも無意識に柔らかな笑顔を浮かべていた。

「……」

次の日、三者面談での席——レイチエルは目の前の青年に固まる。「養父の“スロウン”です」とダグラス。

「いつもダグラスが世話になっています」

誰もいなくなった教室でそれは行われていた。

「あっ！ いいえっ！ こちらこそっ」

握手を交わす手が震えている。ダグラスはおかしくて仕方がなかった。

「そ、それですね……」

席に着き、エメラルドの瞳に見つめられて次の言葉が出ない。

「ダグラスの将来についてなのだが」

「はっ、はいっ」

声が裏返る。それにベリルは少し眉をひそめた。

ハイスクールに入学する時にベリルと会わなかったのか？ という疑問が浮かぶが会わなかったのだ。

正確には会えなかったのである。挨拶のために校内までは入ったベリルだが、緊急の依頼でそのまま引き返した。

ダグラスはこの時に思いついたのだ。初めてベリルを目にする女性教師の反応は面白いかも。と……

「この子の自由にさせている」

「！ しっ、しかしですね……っ」

レイチエルは思わず立ち上がった。この人はダグラスが何を言っているのか知っているの！？ と言いたげな顔だ。

「彼は将来——」

「傭兵になりたい。と言っているのだろうか？」

腕を組んで落ち着いた声で発する。レイチエルはその反応にも驚いた。

「いいんですか……？」

「彼がそう望むのだ、反対する権利は私には無い」

彼女は「信じられない！」といった表情を浮かべる。

「いくら養父でも子どもをきちんと育てる義務があります！」

「それって傭兵がきちんとしてないってこと？」

「っ！？」

しれつと問いかけた少年に彼女は体を強ばらせる。

「ダグ、やめろ」

「だってねえ……父親の職業に難癖なんくせ付けられたら誰だって怒るでしょ？」

「！？」

レイチエルはベリルを凝視した。

言ってしまった言葉はもう消せない。どうしていいのかわからなくてオロオロした。

「……」

悪ガキめ……ベリルは右手で顔を覆って小さく溜息をつく。

「彼の言った事は気にしないでくれ」

「すつ……すいません」

彼女はすっかり小さくなってベリルの顔もまともに見られなくなつてしまった。

「確かに厳しい仕事だ。時には命の奪い合いにもなる」

「……ええ」

ゆつくりと語られる声に静かに見上げる。

「彼は私の後ろを歩く」

「！」

その言葉にハツとして、思わず合わせたベリルの瞳に引き込まれる。

「あなたも現実を知っているだろう。私だけではどうにも出来ない。それほどに世界は大きすぎる」

「……そうですね」

1人が出来る事など、たかが知れている。協力しあう事で人は文明を築き上げてきた。

「仲間は必要だ」

「……」

レイチエルはその言葉に頭カブを垂れた。

この人はダグラスが同じ道に進む事を望んでいた訳じゃない……

それが彼の苦い表情から読み取れた。

ダグラスにもそれ相応の覚悟があつての進路だった事に気付く。ただの憧れの言葉なんかじゃなかった。養父の背中を見て彼はしっかりと決めていたのだ。

担任である彼女が何故、今まで知らなかったのだろうか？ 学校側がダグラスについては伏せていたからだ。

ベリルの事は前校長が知る処で今の校長は新しく赴任してきた者である。

前校長からは引き継ぎの時に特殊な人物について聞かされていたが、まさかその弟子が転入してくるなどとは思つてもいなかった。この街にもベリルにも慣れていない校長は傭兵の弟子をしている事も、ましてや養父であるベリル自身が傭兵である事も隠すと決めた。

隠しておきたい気持ちは理解出来る。だからベリルはそれに抗議はしなかった。

今更、暴露した処で退学には出来ないだろう。全ては計画通り。

「……」

ベリルは少年を横目で睨み付けた。ダグラスはしれつと肩をすくめてみせる。

そうしてレイチエルは納得し、ダグラスの進路にとにかく言う事はしないと本人に伝えた。

「先、行つてて」

少年はそう言いレイチエルに別れの挨拶をする。

「今度、うちにお邪魔してもいいかしら……？」

彼女は遠ざかるベリルの後ろ姿を見つめてほんわりした言葉を発した。思つた通りの反応だが少年は苦笑いを浮かべ目を据わらせ応える。

「あー……やめた方がいいと思うよ」

「どうして？」

ダグラスに振り向いて首をかしげた。

「女としてのプライドが壊れるから」

「は……？」

眉間にしわを寄せた彼女に満面の笑みを浮かべた少年にレイチエルはドキリとする。この少年はベリルとはまた違った魅力ある容姿をしていた。

「あまり彼女を困らせるな」

「はい」

レイチエルと別れてベリルに追いついたダグラスは言われて生返事を返す。彼はそれに小さく溜息について帰り道にあるスーパーマーケットに立ち寄った。

「……」

カートに投げ込まれた商品に眉をひそめる。

「こないだ買ったように思うが」

「成長期ですから」

投げ入れられたのは特大サイズのポテトチップスとポップコーン。ピーナツチョコもプラスされた。

当惑しながらも食材をカートに乗せていく。バランスの良い食事を、と考え基本は日本食だ。

だが、ダグラスは欧米人であるため日本人とは体の構造が異なる。それを考慮したうえでの料理をベリルは毎日、思案していた。

旨味の感覚が鈍いとされる欧米人だが、薄味が基本の日本食でそれが目覚める。ともいわれている。

食材を買い2人で抱えながら家路についた。

*クラスメイト

「何しよげてんの？」

「……君には解らないよ」

次の日、学校の芝生の端っこでうずくまっている少年にダグラスは声をかけた。

放課後に1人芝生でしゃがみ込んでいる背中を見つけて、その後ろ姿からクラスメイトのハリーだと思ったからだ。

ひよろりとした体型でスポーツも得意とはいえない存在感の薄いクラスメイト。

薄汚れたセピア色の髪はボサボサで、そばかすがチャームポイントと言えるほど頬に浮き出ていた。

麻色の瞳に力はない。

「そういうの偏見っていうんだぞ」

ダグラスは笑いながら彼の隣に寝ころぶ。それに少し驚いて顔を向けたが、すぐに目をそらした。

「家でなんかあった？」

「！」

凶星らしい、睨まれた。

「大人なんて嫌いだ……みんな自分勝手に」

「それは僕たちもだろ」

さらりと言われてまた目を合わせる。

丸い赤茶色の瞳が可愛くて一瞬ドキリとする。そして全てを解っているような目から視線を外した。

*向き合う瞳

「大きく区切ったら危険だよ。人それぞれなんだから」

「知った風に……！」

語気の荒くなったハリーにもダグラスは可愛い瞳を向け続ける。

「……」

そんな目を見ていると毒気を抜かれたように不思議と力が抜けていった。

「何があつたかは知らないけど……自分だけの感情で決めつけるのはいけないよ。客観的な視野から見ないと」

「あんたはいいよな……勉強も出来てスポーツ万能で。きっと親からは期待されてんだろ」

「いや、全然」

ダグラスは笑って右手を振った。そしてゴロンと仰向けになる。

「親父には殺されかけたし、おふくろも親父に殺されたし。今は傭兵の弟子してるよ」

「……はい？」

目を丸くしたハリーに構わず続けた。

「まあ、傭兵になるのは昔からの夢だったし。それは叶いそうだけどね」

頭の後ろで腕を組みニコリと笑いかける。

「なんで傭兵なんか……」

「親父がそうだったから」

「！自分を殺そうとした親でしょ？」

「うん」

ハリーは「信じられない……」という目でダグラスを見下ろした。
「ちっさい頃から親父に憧れてたんだ。殺されかけたけど代えようが無かったのさ」

「だからって……っ」

苦笑いを浮かべて発する彼に言葉が詰まる。彼の言っている事が嘘なのか本当なのか……図りかねた。

「言ったでしょ、全体で見ちゃだめだって。確かに親父に殺されかけたけど、傭兵のみんながそうじゃないし親父が傭兵だったから僕を殺そうとした訳じゃないんだから」

「……そうだけど、なんでそんな考えが出来るの？」

ハリーの問いかけに空を見て小さく笑った。

「一番、憧れてた人が凄い人だったから……」

「……」

とても落ち着いた微笑みを見せたダグラスにハリーは沈黙した。

「まあね。確かに初めのうちはちょっとばかり心に傷を負ってたせいか反抗してた時期もあったけど。それもちよつとだけだよ」

片眼を細めて指で示す。

「養父の人よく許してくれたね」

「ベリルも傭兵だから」

「！へえ……」

その言葉で憧れていた人がその人なのだとハリーは察した。

「！？あつ、ベリルってニッケームね……目の色が緑色だからダグラスは慌てて付け加えた。仮の名であるスロウンなどダグラスは滅多に呼ぶ事は無いため、たまに忘れる事がある。」

「……」

ハリーはダグラスをじつと見つめた。

余分な脂肪の無い体型、他校にもグルーピー（過激系の追っかけグループ）がいるほどダグラスは人気がある。

「それでそんなに鍛えてるの？」

「ん？あんまり鍛えてないよ。若い時に無理すると後でガタが来るから軽いスポーツ程度にしとけて言われてるし」

「そうなの？」

「スポーツ選手は短命だろ？長生きするには、ほどほどがいいんだってさ」

「俺……ヨットレーサーになりたくてさ」

ダグラスから視線を外しぼそりと発した。

「お、カツコイイじゃん」

しかしハリーは薄く笑って両膝を抱えた。

「でも、オヤジもおふくろも許してくれなくて……『お前は体力が無いの無理だ』って」

「そりゃそう言うだろうね」

しれっと応えたダグラスの言葉に一瞬、険しい顔になる。だがすぐに頭を膝に埋めて肩を震わせた。

「解ってるよ。でもっ——」

「諦めたくないんなら目指せばいいじゃん」

「簡単に言っなよ!」

声を張り上げた少年に上半身を起こし隣に並んだ。

「ハリーが恐いのは親に反対される事じゃない。自分のなりたいものを目指す事だ」

「!?!? ……」

「親に反対されたとき正直少しホツとしただろ。だから僕の言葉にカツとなった。違う?」

「……」

心を見透かすような瞳に喉を詰まらせる。

「恐いのは解るよ。成功するかどうかなんて解らないんだもの。もしかしたらそれで命を落とすかもしれない」

「……うん」

「でも失敗して後悔する事よりも、やらない事の方が絶対に後悔は大きいよ」

「そう……なのかな」

うつむいて発したハリーに小さく頷いた。

「やればそれは経験になるけど、やらないのは後悔しか残らない。一番、大切なのは経験を積んでいく事だよ」

「経験か……」

「それで死んだとしても、やらないですーっと心に“しこり”を残す事より何倍もいいと思うな」

死んだらそこで終わりだし、気にする必要も無くなっちゃうしね。

「……」

微笑んだダグラスから視線を外し空を見上げる。

「そうだね。君の言う通りだよ」

「……ってベリルが前に言ってたんだ。知り合いの子どもが将来の進路にうだうだ言ってた時に」

「……ダグ」

「何？」

ハリーは、ガバツ！ と彼の両肩を掴み真剣な面持ちで口を開いた。

「君のオヤジさんに会わせてくれよ」

「は……？」

それに苦笑いを返す。

「何言ってるの……？」

「その人に人生について教えて欲しいんだ！」

「人生……ねえ」

両肩を掴まれ、大きくゆすられる彼の口元には生ぬるい笑みが浮かんでいた。

「これから友だち連れていくけどいい？」

授業が終って気持ちの変わらないハリーにせがまれて仕方なく電話をする。

<……構わんが>

「じゃあそういう事でよろしく」

携帯を切って隣で歩行を合わせているハリーにウィンクした。

「ダグ！ 彼を家に呼んだの！？ あたしも行きたい！」

それに喜ぶハリーの後ろから女生徒の黄色い声がけたたましく響いた。

「わたしもっ！」

「私も！」

「男同士の話だからまた今度ね」

にっこりと微笑むとそれだけで女生徒たちは腰砕けになる。

「……」

最強の笑顔だなあ…… ハリーはあつけにとられた。

途中ジュースを買って飲みながら帰路に着く。

「若い！」

「ようこそ」

「ハリーだよ」

ベリルの見た目に驚くハリーを尻目に2人は淡々と会話を交わした。握手をしてリビングに案内される。

リビングとダイニングルームは続きになっていてベリルはそのままキッチンに向かい、冷蔵庫から飲み物とケーキを取り出した。

「えーと……お父さんの名前はなんて言うんだっけ？」

「スロウン」

聞いて、意を決したようにハリーは目をつりあげた。

「……っ！ あ、どうも」

立ち上がるうとした時に飲み物とケーキを出されて思わず恐縮する。

『ベリル』か……なるほど、確かに目の色がエメラルドみたいだ。

「ハリーがベリルに用があるんだってさ」

「私に？」

「うっ！？ えっ？」

笑いながら話を振られ、心の準備が整っていなかったハリーはしどろもどろになって目を泳がせた。

ベリルはソファに腰掛け彼が落ち着くのを待つ。待っている間にダグラスに少し睨みを利かせる。偽名のスロウンではなく本名で呼んだからだ。

ダグラスはそれに小さく肩をすくませ薄く笑い「後で説明する」と目で示した。

「ハリーも食べなよ」

「え？ うん……」

勧められて目の前のケーキに手を伸ばした。

クリームチーズを少し加えたスポンジに、甘すぎない生クリームが上品にデコレートされている。

上にはブルーベリーやラズベリーが綺麗に乗せられていた。

*その歩み

「あのっ……俺……」

ケーキを食べて落ち着いたハリーが少しずつ口を開く。

「なりたいものがあつて……でも、親に反対されて……あのでもっ！ ダグに『本当は反対されてホッとしてるんだろ？』って言われて……」

そこまで聞いてベリルは納得した。以前、知り合いに呼び出されて「子どもを諭^{さと}して欲しい」と頼まれた時の話をこの子にしたのかと察する。

「誰でも先の事は不安だ」

「うん……」

「自分がそれを諦めて後悔しないのなら、それもいいだろう。道を誤らなければ進む道は自由だ」

「自由……」

落ち着いた声がハリーの心にこだまする。

「『自由』という言葉は……とても重い」

「!？」

少年はハッとした。

「親の言う事ならばそこには責任は無いのかもしれない。自分で決め、進むという自由にはとても大きな責任がのしかかる。人はそれを無意識に避けようとするのだろう」

「自由の、責任……」

「時としてそうではない場合もあるが、逃げる事は容易い。もちろん逃げる事が悪い訳ではない。立ち向かわねばならない時を冷静に見極める事が重要だ」

ベリルの柔らかな微笑みにハリーは胸のつかえが取れたような気がした。

「ありがとうございます！」

勢いよく立ち上がり震える声を張り上げた。

「ゆっくりしてゆっくり」

彼の表情を見て目を細める。

「はい！」

元気の良い声に小さく笑って立ち上がり夕飯の準備をするためキッチンに向かった。

「来て良かった……ありがとうダグ」

「いえいえ」

「俺……親にちゃんと話してみるよ」

帰り際、ハリーはダグラスに笑顔で発した。

「反対されたらじっくり考えて。それでも諦めきれないなら、また話す」

「うん。それがいいね」

「ホントにありがとう」

手を振って見送る。遠ざかる後ろ姿を見つめダグラスは小さく笑って家に入った。

「どうした」

リビングで眉をひそめているダグラスに声をかけた。

「みんな青春してるな〜って」

「……なんだそれは」

当惑しながらジュースの瓶をテーブルに乗せると少年は手にとつてグラスに注いだ。

「だって普通に悩んでるなんてさ〜」

「そういうものだ」

「じゃあ、ベリルは普通に青春してた記憶あるの〜？」

言ってキッチンに戻ろうとしたベリルに目を据わらせて問いかけた。

「……」

それにピタリと動きを止める。思い出そうとするようなしぐさをするが……

「今日はチキンシチューだ」

しれっとキッチンに再び足を向けた。

「無かったんだな……」

ソファの背もたれに腕と頭を乗せてぼそりとつぶやいた。

「おやすみなさい」

「ん、おやすみ」

深夜、ソファでノートパソコンを見つめているベリルに言ってダグラスは自分の部屋に向かった。

このこの処、彼は何かを調べているようだった。

ローランドという傭兵から投げられたナイフに刻まれていた『シヤイニー・ブレイド』という名前を見てからだ。

少年はベッドに潜り込み天井を見つめる。

麻薬シンジケートらしいけど……対立している立場のローランドがどうしてベリルにそんな情報を流したんだろう？

何か裏があると思うんだけど……と考えながらダグラスは意識を遠ざけた。

「……」

ノートパソコンのディスプレイを見つめて苦い表情を浮かべる。

「デカイな……」

周りから攻めるか？ と思案する。ディスプレイに映し出されていたのは麻薬組織の名前の一覧。名前の隣にはマークが1つから3つ付いている。

小さく溜息を吐き出し、彼は静かにノートパソコンを閉じた。

「いつてきまーす」

「気をつけてな」

朝——ベリルの作ったミックスサンドをほおぼり学校に向かう少年を見送り携帯を取り出して電話をかけた。

「戦力が欲しい。あと10人、頼む」

通話を切って地下の武器庫に降りる。選びながら黒い大きなバッグに詰めていった。

「……」

ダグラスはしばらく歩いて家を一瞥する。ベリルの様子から『仕事』をする気なのだと気付いた。

ベリルは自ら犯罪組織の壊滅に動く事がある——消しても消しても湧くように作られる組織に、いちたちごっこのような構図に呆れながらも彼は決してその手を休めない。

小さな組織ならダグラスの同行も許してくれるが大きな組織となると留守番を言いつけられる。

今回は卒業試験を間近に控えているためベリルは当然、留守番を言い渡すだろう。本人も卒業のために、だだをこねるつもりはなかった。

「おはよう！」

「あ、おはよ」

ハリーが元気よく挨拶してきた。その顔は晴れやかで……

「話したの？」

「うん」

廊下を歩きながら会話を続ける。

「反対されたよ」

「そうなんだ」

ハリーは落ち込む事もなく笑って付け加えた。

「ちよつとびっくりしたみたい。また考えて話すかどうか決める事にするよ」

「それがいいね」

少しずつ前に進むハリー。人の歩む速度はそれぞれだ。

「僕は……少し速すぎたのかな」

立ち止まりつぶやいた。

「だったら、ベリルはもつと速かったね」

ニヤリと笑みを浮かべて教室に滑り込んだ。

「なあ、またおまえんちに行っていていいか？」

授業の合間にハリーが声をかけてきた。

「ああ、いいよ」

「じゃ番号、交換しようぜ」

携帯を取り出す。それにならないダグラスも携帯をバックポケットから出し赤外線通信で交換した。

「！」

そういえば友達を家に呼んだ事って今までほとんど無かったな。

ベリルは怒らないだろうけど、気が引けるのは確かだ。うちに呼んだって何かある訳でもないしなあ……などと考える。友達の家にはよく遊びに行く事はあるが自分の家となると呼んでどうすればいいのかが解らない。

「普通に遊ばいいんだろうけどね」

口の中でつぶやいた。卒業試験を受ける事もありダグラスは1人、特別授業を受ける。

それが終わって帰路に着く。

「！」

校舎を出た処で担任のレイチェルが待っていた。

「先生。どしたの？」

「家にお邪魔してもいいかしら」

見ると、先ほどとは少し雰囲気が変わっている。

化粧し直したな……ダグラスは呆れて溜息を漏らした。

「いいけど、父さんは明日か明後日に仕事に行くから、相手出来な

「と思うよ」

「構わないわ。ダグの進路について少し話しておきたいだけだから」
進路？ これ以上、何か話す事なんかあったっけ？ ダグラスは首をかしげる。

「じゃあメールしとくね」

「お願い」

メールを打ちレイチェルを連れて歩く。彼女は束ねてアップしていたブロンドを降ろし、緩くカールされた髪は歩くとそれに合わせて揺れていた。

オリーブ色の瞳は潤んでいるようにも見えるが彼女は乱視だ。

「……」

ベリルは携帯の画面を見つめて当惑していた。

『レイチェル先生も一緒なのでよろしく』

何故、彼女まで……？ ダグの進路についてだろうか？ 彼にはそれくらいしか思いつかない。

考えても仕方がないので来客の準備を始めた。

「なかなか良いおうちね」

「どこも一緒でしょ」

ベリルが住んでるからそう思ってるだけだろ……ダグラスは呆れた。

「ただいま」

「邪魔します」

綺麗にされている玄関と廊下を見回しダグラスを追う。大抵の国では靴のまま家に入る。日本のように靴を脱ぐ国の方が少ないといっ

つていい。
入り口から見える上に行く階段を右の視界に捉えながら通り越し左に見えるドアの無い2つの入り口の奥にある方に入る。

「！」

奥にあるダイニングルームからベリルが歩いてくるのが見えたレイチエルは思わず体を強ばらせた。

「ようこそ」

「ど……どうも」

ベリルがトレイを持続きになっているリビングに促す。

「あ……おかまいなく」

ソファに腰をかけるレイチエルの前にティカップが差し出され、少し離れてお茶請けが置かれた。

ダグラスは階段に向かい自分の部屋にひとまず荷物を置いてすぐにリビングに降りる。

「随分、綺麗にされてらっしゃるのね」

レイチエルは思っていたイメージと違っていたため拍子抜けしていた。

いや、イメージ通りといえばイメージ通りなのだが……見た目と同じで実に綺麗な……って、そうじゃなくて！ 傭兵をしているというから家は散らかっているかも……そんなギャップも魅力的よね！ などと考えていた自分が少し情けなかった。

「こ……恋人とか、いらっしゃるの？」

恋人くらいいてもおかしくないものね……と自分を慰めながら訊いてみる。

「いいや」

「いないの！？」

声を張り上げたレイチエルに少し驚いた顔をした。

「ハッ！？ ごめんなさい」

「こんな仕事をしているのでね」

彼はそれに柔らかな笑顔を浮かべて応える。

*小悪魔なひととき

小さく笑い斜めの1人がけソファに腰を落とす。

「……」

ダグラスはその様子を眺めながら冷蔵庫を開いて牛乳を取り出し、グラスに注いで一気に飲み干した。

少し水洗いして今度はソーダを注ぎリビングに足を向ける。

「もうすぐ試験でしょ」

少年を一瞥して彼女は切り出した。

「！ ああ……」

その事で来たのか……と納得した。

が――ダグラスには“こじつけ”にしか聞こえない。

まあね、ベリルはホンっとに色恋沙汰には“うとい”から仕方がないけどさ。レイチエルが色目使ってるのにも全然、気が付いてないし。

半ば呆れながら2人を交互に見やる。

「！」

ダグラスは何かを思いついてニヤリと口の端をつり上げた。

「父さん」

「ん？」

心中ではそのような呼び方をされて少し驚いた彼だが、見た目にそんな素振りにはまったく無い。

「今日の晩ご飯は何？」

「サーモンのテリーヌにチキンドリアと里芋の煮付けだが」

* 楽しみと悲しみは今日と明日

「へ……？」

レイチエルはぽかんと口を開けた。

「父さん料理得意なんだ」

しれっと応える。

「……」

彼女はダグラスを見てベリルに目を移した。

「お料理、得意なんですか……」

「炊事、洗濯、掃除も完璧」

ダグラスが指折り数えて説明する。それにベリルは気が付いてぎろりと睨んだ。

彼女の反応を楽しんでいるのが丸わかりだ。こういう地味な意地悪をダグラスは楽しんでいる。

「じゃ、じゃあ私はこれで失礼しますわ」

「気をつけて」

夕闇迫る住宅街、レイチエルは足取り重くベリルの家をあとにした。

「……」

彼女の背中を見送りダグラスに目を映す。

「いつ発つの？」

「！ 明日の午後だ」

両腕を頭の後ろに回して訊ねたダグラスに答える。「ふーん」とつぶやきながら家の中に入っていく少年の後を追うようにベリルも家の中へ。

「どれくらい？」

「移動を含めて2週間ほどになる」

少年はダイニングテーブルに腰掛けた。ベリルはそれを見てキッ

チンに向かう。

「……」

夕飯の準備をしながら少年を一瞥した。いちべつ

要領の良い、察しの良い子ども——確かにそうだ。ダグラスは他の子どもよりも扱いやすいだろう。

だが……我が儘を言わない分、心にため込んでしまいかねない。そうではないかと思いたいが……10代の心の中は複雑でベリルには到底、計り知れなかった。

「で、場所は？」

出されたチキンドリアを食べながらダグラスが再び訊ねる。

「南アフリカ」

「了解」

「麻薬製造の組織を叩く」

「！」

説明したベリルに少年はにこりと笑った。

「いつてきまーす！ちゃんと留守番してるから安心して行つてきてね」

「してなければケツを叩く」

見送りの言葉に「うげ」と顔を歪めて家を出る。

そしてダグラスを見送ったあと、黒いバッグを肩にかけピックアップトラックに乗り込んだ。

今回、叩く組織は『シャイニー・ブレイド』の最下層に位置する集団だ。ここを叩いたとしても、大元の組織にはたどり着かないようになっているだろう。

しかし、製造している1つを潰す事で多少なりとも奴らに痛手を負わせる事は出来る。地道な作業だがやらないよりはマシだ。ハンドルを握り苦笑いを浮かべる。

この“いたちごっこ”は、いつまで続くのだろうか……考えても

答えは出ない。

人は弱い——いつ暗闇にその足を浸してしまうか解らない。しかしその弱さは強さをも生み出す。時として考えられない力を絞り出す。

ベリルはその可能性を信じているのかもしれない……彼の戦い続ける理由を考えるとダグラスはいつもそこにたどり着くのだった。

「おーいダグ！」

「！ よう」

授業を終えて校舎を出た処でハリーに呼び止められる。嬉しそうに駆け寄ってきたハリーがダグラスの肩に腕を回した。

「なあ、おまえんちに行つていいか？」

「いいけど、ベリルいないよ」

それにハリーは快活な声をあげて笑った。

「違つて！ ……つて出張？」

「うん。組織を潰しに行った」

平然と発したダグラスに顔をしかめる。

「麻薬製造組織だつて」

「へ、へえ……まあいいや。あとで家に行く」

互いに手を挙げて一端、別れた。ダグラスは途中のスーパーマーケットで炭酸飲料を買つて家に戻る。

冷蔵庫を開けてみると思った通り、日持ちのするゼリーが入っていた。

キッチンを見回すとバスケットが目に入る。どこにでもある、中くらいのバスケットの上にかけられたクロスをつまんで中を覗いてみる。

そこにあつたのはクッキー。1つ取って食べてみた。軽い食感で甘すぎない。

ハリーが来るまで着替えを済ませてリビングでくつろぐ事にした。ソファに寝ころんでテレビを見る。以前に、浅く座ってだらしなく

背もたれにもたれかかっていたらベリルに頭を殴られた。

浅く座る事は腰に大きな負担をかけてしまう。「最後まで自分の足で歩きたいなら浅く座るな」と言われた。

『深く座るか寝ころべ』

それがこの家に来て初めてベリルにしかられた事だった。

「！」

そうこうしているうちに玄関の呼び鈴が鳴る。出迎えると、ハリーがポテトチップスの袋をダグラスに手渡した。

「はい、手みやげ」

「サンキュ」

ハリーをリビングに促し、飲み物を取りに冷蔵庫に向かう。グラスに炭酸飲料を注いでソファに腰掛けたハリーの前に置く。

「お、見たこと無いクッキーだ」

「ベリルのお手製」

1つ取って口にぽいと投げ入れた。

「！ 美味しいな、これ」

「うん」

「でさ……あれからまた親に言っただよ」

「そしたら？」

「反対された」

少ししょんぼりと目を伏せる。それを一瞥してハリーの持つてきたポテトチップスの封を開けた。

「そんなに気にしなさんな。人間万事塞翁が馬じんかんばんじさいおうってね」

「ジン……なんだって？」

「あゝ Joy and sorrow are today and tomorrow. (楽しみと悲しみは今日と明日) って事。

中国の古事にあることわざだよ」

「気の持ちようってか？ おまえよく知ってるねえ……中国の古事か」

「ベリルに教わった」

テレビを見ながら応えたダグラスに目を丸くした。

「親父さん頭いいんだなあ……ホントに傭兵？」

「ホントだよ」

「いつから傭兵してんの？」

ハリーは身を乗り出した。

「さあ？ 15歳でこの世界に入ったっていうのは聞いてるけど」

「じゃあ、その前は？」

「知らない」

ハリーはそれに首をかしげた。

「訊かないのか？」

「んゝあんまり話したくないみたい」

「もしかして、実はどっかの財閥の息子とかさ」

「まっさかあ！」

ダグラスがケタケタと笑った。しかしハリーは少し真剣な目をして続ける。

「どっかの国の王子様……とか」

「……」

2人はしばらく互いを見合う。

「……んな訳ないよなあ」

同時に口にした。それからしばらく会話して、ハリーは帰って行く。

手を振って見送りふと思ひ起こす。

「王子様……ねえ」

薄く笑う。

そつだったら面白いけどね。でも違う気がする。確かにベリルは上品な物腰で頭もいいけど。むしろ……

「むしろ『神様が作った』って言われた方が、なんか納得するんだよね」

つぶやいて家に入った。

それから何事も無くあつという間に2週間は過ぎる。

初めて留守番をしたときベリルは食事の世話を料理の出来る傭兵に頼んだ事があつた。ダグラスはそれが嫌で「1人で大丈夫だから次からは呼ばないで」と頼むと、彼はそれを素直に受け入れた。

少し拍子抜けしたが、なんとなく悪い気がして留守番の間は自炊するようにした。

ちよつとした“我が儘”だったのだが、ベリルには通用しなかった。少年を信用したのか、ただ突き放しただけなのかは解らない。

ただ、素直に聞いてくれた彼の言動で「もしこれで変な事したら、全ては自分のまいた種」だという事を痛感した。

結局は『ベリルの思つぽ』なのである。のらりくらりとしてるくせに、要所要所は絶対に外さない。

どこまでが真剣で、どこまでがふざけているのかもまったくもって掴めない。

とにかく、もうすぐベリルが帰ってくるのだ。少年は待ち遠しくて仕方がなかった。

『鬼の居ぬ間に……』とは世間では言うものの、ダグラスにとっては退屈きわまりない期間だった。教わりたいことは山ほどあるのにその当人がいないのでは独学では限界がある。

予定では今日の午後、家に帰る頃には帰ってきているはずだ。ダグラスはトーストをくわえて学校に向かった。

この学校には学食がある。

課外授業でベリルに弁当を作ってもらった事があつたが、開けてみるとクラスメイトが目を見張るほどの出来栄だった。

みんなが羨ましがってた事を覚えてる。おかげで、ほとんどクラスメイトに食べられてしまったけど……代わりにピーナツバターサンドとか押しつけてくんなよな。

まあ、弁当の残りが家にあつたからどうにか味わう事は出来た訳だけどさ。ベリルが不死でお腹を空かさないから良かったものの……

…と考えながら早く授業が終わらないものかと、そわそわした。

「！」

そうして授業の終わりを告げるチャイムが耳に響く。ダグラスは急いでスポーツバッグに教科書を詰め教室から転がるように出て行った。

*アルラウネの誘惑

「！」

庭から見えるガレージは閉まってるけどシャッターを動かしたあとがある。全自動のシャッターのガレージを横目に玄関のドアノブを掴んだ。

「！………つと鍵、鍵」

オートロックだったと少年は急いで鍵を取り出して鍵穴にキーを詰める。

「ただいま」

荒い息を整えリビングに足を向けた。

「おかえり」

聞き慣れた声がしてホッとする。

「あとで訊かせてよ！」

言って階段を駆け上がり荷物をベッドに投げ置いた。その勢いのまま階段を駆け下りてリビングに投げるように体を押し込む。

「慌てるな」

ベリルがティカップを持ちながらソファに向かっていた。

「どうだったの！？」

優雅に紅茶を傾けているベリルの後ろで、背もたれに両手を乗せ嬉しそうに問いかける。

「死者はゼロ。重傷者は相手に1名。全員、警察に引き渡したよ」

「相手はどんな火器使ってきたの！？」

ダグラスは機関銃のようにベリルを質問攻めにした。彼ははそれに1つ1つ答えていく。彼が帰ってきた日はそれだけで終わってしまう。

ベリルは嫌な顔1つせず少年の質問には丁寧に答えていった。

「あ、そうだ」

ブランドーを取りにキッチンに立ち上がるベリルに笑顔で並んだ。

「ほら」

「！ ほっ……」

同じ目の高さになった少年に感心したような声をあげる。

「人の成長とは速いものだな」

さすが成長期。この2週間でベリルと同じ174？に伸びていた。急激な成長で関節の痛みが激しい。当分はきついトレーニングは避けるようにとベリルは指示した。

次の日、ダグラスは寝不足で目をこすりながらリビングに降りてきた。

「おはよ……」

「おはよう」

疲れの残る様子のダグラスとは違って彼はいつも通りだった。ソファに腰掛けてコーヒーを傾けている。

「……」

こういう時だけはベリルの不死が羨ましく思える。

「不死にしてやろうか？」と誰かがもちかけても、当然「NO」と答えるけどね。

『死なない体』じゃなく『死ねない体』になるのは勘弁したい。

それで正常な意識を保っていられるのはベリルくらいだと思う。

眠いけれど目は覚めてしまったダグラスは長い溜息を吐き出しながら、冷蔵庫から牛乳を取り出してグラスに注ぐ。

一気飲みして口元をぐいと手の甲で拭い2杯目を注いだ。

今日は学校も休みだ。考えたら今日ゆっくり訊けばよかったんだよな……早く聞きたいものだから焦ってまた質問攻めにしてしまった。

牛乳の入ったグラスをダイニングテーブルに乗せて少年は反省した。

それから数ヶ月が経ち17歳になったダグラスは晴れてハイスク

ールを卒業した。

その間にベリルは一度、麻薬組織壊滅に動き見事に成功させる。留守番をしていたダグラスはその話に聞き入った。単に聞くだけじゃなくそこから自分の力として吸収するものがあるからだ。

<大学はどこに？>

「近くの大学に通うそうだ」

ダグラスの担任だったレイチエルからの電話をベリルはリビングでくつろぎながら受けている。

<寮には？>

「いや」

<彼の学力ならもつといい大学にも入れますのに……>

「あそこは生物学に力を入れていてね」

<生物学……？>

「どの生物の研究でもOKなのだよ。ダグは人体について勉強するつもりらしい」

<！　そうですか。それで、彼は何年で出るつもりだと？>

「2年で試験を受けると言っているようだが。3年は必要だろう」

<彼の担任になれて幸せでしたわ>

「そう言ってもらえると有り難い」

通話を切って小さく笑った。それはダグラスの成長をほほえましく思う感情からなのか、自分が親代わりをしているという呆れからなのかは解らない。

すでに入学試験には合格し、数日後には大学に通う事になるダグラスはその準備に追われていた。

この先よほどの事がない限り手助けをするつもりはない。子どものみままではいられないのだ。彼もそれを充分に理解している。

季節は10月、雨期を迎えていた。むしむしする湿気の中、珍しく晴れた今日ダグラスは買い物に出かけていた。

「ただいまあゝ」

「おかえり」

大荷物を抱えたダグラスがリビングに入るなり持っていた紙バッグをドカツと床に置いて冷蔵庫に足早に向かった。

ベリルが作っていたウーロン茶をラツパ飲みする。

「……つぶはゝ。はあゝ生き返る」

「お疲れさん」

ソファに座ったままクスツと笑って応えた。

その時——玄関の呼び鈴が訪問者を告げる。

「あ、俺が出るよ」

出ようとしたベリルを制止して玄関に向かった。

見た目だけでなく言動も大人びて見えるようになってきたダグラスに苦笑いを浮かべる。

「はい」

と応えて見えない相手の気配を探る——気配からして敵意は感じない。ダグラスは覗き窓を見ずにドアを開いた。

「こんにちは」

「！」

銀の髪的美女に少年は一瞬、固まる。

「ベリルって人はいるかしら？」

「あ、ああ。うん」

しなやかに揺れる肩までの銀の髪とワインレッドのような瞳。細身だが筋肉質の体をダグラスの目が自然と追った。

「そこ」

後ろからリビングの入り口を示す。

「初めまして、スーザン・チェイニーよ」

立ち上がり差し出された手を握り返す。165?と、長身の彼女の瞳はベリルを品定めするように動いていた。

「私に何か用かね」

ソファに促し腰掛ける。スーザンも斜めの1人がけソファに腰を

落とし、持っていた四角いオレンジのバッグから小さな物体を取り出した。

5? 四方のケースに入っているマイクロSDを受け取り、テーブルの上に置いてあったノートパソコンを開く。

「……」

少年はその様子を見つめながら飲み物をグラスに注ぎスーザンの前に差し出した。彼女はそれに手で応えて、少年は向かいの1人がけソファに座る。

マイクロSDが差し込まれ、初めに出てきた画像にダグラスは驚いてぴくりと反応した。

「彼を追ってほしいの」

「ほう……」

ベリルは目を細める。映し出されているのはローランドだ。

「彼とは何度か闘った事があるんでしょう?」

「うむ」

それをよく知っている彼女に薄笑いを浮かべるとそれに笑顔で応えた。

「あなたとタイマンはって生き残っている人間は少ないもの。割と有名よ」

肩をすくめたあと若く見える顔立ちに険しい表情を浮かべる。

「彼の動きを探ってほしいの。出来るなら接触も……」

「……」

スーザンの言葉を聞きながらSDカードに保存されているローランドのデータを送っていく。

「……なんでベリルに?」

何も返さない彼に代わってダグラスが問いかけた。

「あなたは色んな意味で目立つ存在だけど、依頼の成功率は100%に近い。ローランドは抜け目のない相手よ、確実な手応えが欲しいの」

「このローランドって人を探ったら何があるの?」

「彼は7年ほど前から名の知れた傭兵なの。『不死身のセルテス』と呼ばれているわ」

彼のフルネームはローランド・H・セルテス。アメリカ人だ。

「それって……ベリルと何度も闘ってるから？」

「そうでしょうね」

スーザンはグラスを手に取り、喉の渴きを潤した。そしてディスプレイを見つめているベリルに目を移す。

「どう？ 受けてくれる？」

「もう1つ聞きたいんだけど」

ダグラスは右手の人差し指を立てた。

「何かしら」

「あなたの正体」

スーザンは言ってなかった事に気付いて笑みをこぼす。

「そうだったわね。私は『サイクロン』に所属している傭兵よ。我々のスポンサーが“アルラウネ”の根絶に積極的でね。今回、大きな組織を叩くために多方面からの要請に踏み切ったの」

『アルラウネ』とは麻薬組織の俗称だ。

「『サイクロン』……？」

ベリルがつぶやくように口を開いた。その口元は薄笑いを浮かべている。

「本当の事を言わないつもりなら依頼は受けん」

「！？」

「え？」

足を組んでスーザンに無表情な顔を向けるベリルの瞳は厳しかった。

「……」

しばらくの沈黙のあと、スーザンは諦めたように肩を落とし溜息を吐く。

「やっぱり、あなたに嘘は通用しないのね。どこまで気付いているのかしら？」

「傭兵は副業だろう、独特の“なまり”がある。誤魔化せているよ
うだが、その『クセ』はなかなか抜けるものではない」

「……」

淡々と説明する彼にスーザンは冷たいものが背中に流れた。

「一度戻って上司と話し合う事だ。正式な依頼なら受けよう」

「……この人、何者なの？」

正体の掴めないダグラスは怪訝な表情を浮かべる。

「ジ・エージェンシー」

つぶやくように発した言葉に少年は目を丸くした。

「！ それって……CIA（アメリカ中央情報局）！？」

CIAとは、CIA長官によって統括とつかつされる対外諜報活動を行う
アメリカ合衆国の情報機関の1つである。

ベリルの言った『ジ・エージェンシー』とはCIAの通称の一つ
だ。

* タイミング

「もう一つ」

左の人差し指を立てて口の端を吊り上げる。

「ローランドも仲間だな」

「!？」

ビクリと体を強ばらせた。

「えっ!？ マジでっ？」

「……っ」

声を詰まらせる。

「どうして……そうだと」

スーザンは空恐ろしくなり絞り出すように問いかけた。彼に渡したデータは『ローランド・H・セルテス』としてのデータだ。不備はない。

「タイミングが良すぎる。ただ殺しをしないというだけで私が彼を殺さない理由には成り得ない」

ローランドはベリルの特徴を知りすぎていた。よほど詳細なデータを見て研究しつくしたのだろう。

CIAが人道的な組織ではない事は知っている。国家の利益のためには時として殺人も平気でこなす。

ローランドが接触してきた時期とスーザンが訊ねてきた今——あまりにもタイミングが良すぎた。

「色々と問題もあるのだろう。お前たちの本名は聞かないでおく」

* 集結

「アハ……ハ」

しれつと応えた彼にスーザンは言葉も無く笑いをこぼす。

「あなただから見抜けた。と思つて正解かしら」

「さあ、どうだかね」

「データ通りのらりくらりとした受け答えね。やんなっちゃう」

ゆっくり立ち上がり肩をすくめて両手を少し広げた。

「いいわ。1週間ほど待つて」

「！ 随分、長いんだね」

「いくら彼とはいえ、一介の傭兵に頼むのよ？ 説得には時間がかかるわ」

言つたダグラスにニコリと笑う。

スーザンは上司と話し合うために、依頼はひとまず『保留』として去つていった。

走り去るミニクーパーの後ろ姿を見つめながら問いかける。

「来ると思う？」

「来るだろうね」

笑みを浮かべて家に入っていく。

「……」

全てを悟つた物言いに、大きな戦いがいずれ訪れる事を予感した。

それからしばらくは大学生活を満喫し、その合間をぬってベリルの仕事にも参加していた。スーザンからの返事は2週間もかかつてようやく国からの正式な依頼となった。

ローランドとの接触は大抵は戦闘の最中で、お互いが残していったアイテムの中に忍ばせるという方法だ。

「いくらなんでもこれは無いよねえ」

苦笑いで発するダグラスにベリルも笑顔で応える。

南米のジャングル地帯——ここにあつた麻薬密売組織を叩いた時にローランドが現れた。

ベリルの左太ももに深々と突き刺さつたボウガンの矢。その羽の部分の軸をバチン！と切り落とし矢の先端の方から思い切つて引き抜く。

「……っ」

少し唸りをあげる。あのまま放つておいても内部に突き刺さつていいる部分はベリルの細胞に変換されて無くなるのだが、今回はそれをする事は出来ない。

何せ、軸の部分には……

「！ あつた」

空洞になつていいる軸をのぞき込んだダグラスが声を出す。中にあつた紙切れを取り出すと、そこには不規則に並べられた記号が書かれていた。

「はい」

片膝を立てて回復を待つていいるベリルに手渡す。

「……」

それをしばらく見つめて、「覚えた」というようにライターを手に取り火を付けた。焦げた紙切れを握りつぶし風に散らせる。

「撤収だ」

立ち上がり仲間たちに指示をした。

むせかえるような大気——刻一刻と“その時”が迫つていいる事を告げるように空は揺らいでいた。

そんな事を繰り返しダグラスは18歳となる。

今でも時折ミーナから携帯にメールが届く。ほんの2年前の事なのに、酷く昔の事のようにダグラスは感じた。

それほどにめまぐるしく彼の周りは変化を遂げている。

子どもだった時代は終りを告げ、成人としてベリルの弟子である事を再認識させられた。今では立派に彼のサブリーダーとして勤めを果たし、信頼度を上げている。

「……」

私から離れる日もそう遠くはないだろう……ダグラスの姿に目を細める。

「ベリル！」

レンガと漆喰で塗り固められた大きな建物から駆け出してくる1つの影はダグラスだ。

勢いよく向かってくるピックアップトラックはダグラスの前で音を立てて止まる。急いでドアを開けて転がるように乗り込むとドアが閉まるのも待てないように車はエンジンを全開にした。

「ふわ……疲れた」

「休学届けは出せたか」

「うん、バッチリ」

運転席のベリルに親指を立てて笑った。

周りから切り崩されていく牙城に焦った敵はベリルとダグラスに直接攻撃をしかけてきた。

「そろそろだな……」

ぼそりとつぶやいたベリルの元に暗殺者が現れた。

しかし時すでに遅し——彼は大本を叩くために動き出していた。

大本……『シャイニー・ブレイド』だ。

<入り口で待っている>

大学に休学届けを出しにきたダグラスの携帯にベリルの急ぐ声が届く。

「ええー！？ そのまま行くの？」

なんとなく解っていたダグラスだったが、少しくらい不満を口にしたってベリルは怒らない。

ロッカーに隠していた武器を一通り手にして入り口の影でベリルの車を待っていた。そうしてピックアップトラックを遠目に確認して外に駆け出し今に至る……という訳だ。

「ランデブー・ポイントは？」

「キト」

「！ エクアドルの首都じゃん」

エクアドル共和国。南アメリカ西部に位置する共和制国家で赤道直下にあり、本土は標高によって三地域に分かれている。

赤道直下の熱帯だが、標高の高い地域や海流により過ごしやすい気候の地域も存在する。ガラパゴス諸島は本土から西に1000km程離れたところに位置している。

「本拠地はエクアドルにあるのか……」

ダグラスはぼそりと発した。

エクアドル共和国の首都キトはアンデス山脈の中腹にあるため比較的涼しい。

「ジャングル地帯じゃなくて良かった……虫が一杯なんだもん」

肩をすくめたダグラスにベリルは鼻で笑う。

「でっかいムカデが背中を這った時の感覚ときたら！」

「ククク……」

ダグラスの身振り手振りがおかしくて笑いをこぼした。

こんな風に笑うベリルが好きだった。感情の起伏が緩やかな彼の取り崩した顔や焦ったようなしぐさに何故かホツとする。

人間離れたその存在感に、少しの不安を覚える事がある。

いつか本当にこの世界から消えて、神様の横の玉座にちゃっかり座ってるんじゃないだろうか……なんて考えてしまうのだ。

そんな事あるわけがないと思いつつ、人間らしい表情に胸をなで下ろす。

個人が所有する空港からジェットを飛ばしてもらうため、車を積み込みベリルが副操縦士を務めた。

途中で給油をして、エクアドル市内にあるマリスカル国際空港に降り立つ。ここは軍民間共用の空港だ、こちらの軍にあらかじめ連絡してある。

エクアドル共和国の首都キトは歴史的建造物が建ち並ぶ世界遺産の街でもある。

キトで半数の仲間たちと落ち合い北西にあるサン・ディエゴアルトで残りの仲間と待ち合わせる段取りだ。

そしてサン・ディエゴアルトで最終チェックと資材やその他の武器の調達を行い、翌朝に移動を開始する。

こちらの動きは相手にはすでに気付かれているだろう。それなら堂々と踏み込むまでだ。

「ベリル！」

雑多の人混みの中、ベリルを呼ぶ声が聞こえる。振り返ると、手を挙げて笑顔で駆け寄る男が見えた。

「ワイトか」

「久しぶりだな」

硬い黒髪と漆黒の瞳、無骨な顔立ちの男はベリルを見下ろして懐かしい目を向けた。どうやら今回の作戦に参加する仲間の1人らしい。その大きな手を差し出して握手を交わす。

「何年ぶりだ？ 相変わらずお前は変わらんなあ」

ワハハハ……！ と30代後半の男は外見に見合った笑い声を発した。

「他のもちやんと来てるぜ」

ワイトと呼ばれた男は後ろに親指を示す。

「……」

歩いてくる集団にベリルは目を細める。顔なじみの傭兵たちが笑顔を見せて軽く手を振った。

「おう！ ボウズ、おっきくなったなあ」

「オルソン！ 久しぶり」

ガシガシとダグラスの頭を痛いほどなでる男。ブラウンの髪に栗

色の瞳、彫りの深い顔立ちは30代に入っただけだと窺える。

ここで落ち合うのは25人。サン・ディエゴアルトでは残り25人と落ち合う。

空き地に集まり、ベリルはそれぞれの顔を確認する。

確認を終えて無言で小さく頷き一同は移動を開始した。

皆は装備を隠す事なく山岳地帯ならではの武装をしている。サン
ドカラーのカーゴパンツにアサルトジャケットにタクティカルベ
ストといかにも……な恰好。

ライフルなどの火器はそれぞれのジープやピックアップトラック
に積まれている。

数台の車が北西のサン・ディエゴアルトに向けて走る。

<ベリル、気付いていたか？>

カーナビの処に差し込まれている開いた携帯からワイトの声が響
いた。

「うむ」

<敵さんも警戒を始める頃だな>とオルソン。

彼らが話しているのはキトでの事だ。ベリルたちの様子を窺っ
ていた1人の男について話し合っている。

私服だったが、その鋭い眼差しで一般人ではない事にはすぐに気
付いていた。

<規模はかなりのものだと言っているが、敵の拠点はどっかの工場
跡地だろう？>

ワイトが少し不安げに訊ねた。それにオルソンが笑って応える。

<データはきっちり覚えたんだろ？ だったら大丈夫さ>

遂行までに時間がかかったのは、小さな組織を叩いていただけで
はなく組織そのものを調べるのにも手間取っていたからだ。

それだけ巧妙に隠れていた……という事がローランドの潜入捜査
とベリルとの接触で内と外の連携が必要だったのだと改めて思い知
る。

「……」

ダグラスはそんな軽い会話の中に今回の作戦の厳しさを感じていた。

25人で半分という事はベリルは50人の傭兵を要請したという事になる。報酬はアメリカ合衆国とエクアドル政府から受け取るにしても、彼には初めての大規模戦闘だった。

自然と喉が渴いて生唾を飲み込む音が聞こえそうだった。

「人数が増えたただけだ。今までと同じように動けばよい」

「！」

ベリルが目を向けずに発した。口元にうつすらと浮かぶ微笑みにダグラスは緊張が和らいだ。

「……」

そうだが、やる事は今までと変わらない。戦って勝利を手にするだけだ――

サン・ディエゴアルトに到着し、残りの仲間と合流する。

「！」

その中にスーザンの姿を見つけたダグラスは急いで駆け寄った。

*見えるものと見えたもの

「ハアイ」

「なんでここに!？」

明るく挨拶したスーザンに驚いて声をあげた。

「決まってるでしょ、敵を叩くためよ」

「それだけか」

「!」

ハッとしてダグラスが振り返る。

エメラルドの瞳を静かにスーザンに向けていた。隠しきれない事を知っている彼女は観念したように苦笑いを浮かべる。

「もちろん、あなたの力も見定めるためよ……解るでしょ」

当然のような顔をしてベリルに挑戦的な目を向ける。

「お前の力も期待している」

薄く笑って遠ざかった。他の仲間と打ち合わせをするためだ。

「……はあ」

えもいわれぬ威圧感から解放されてスーザンは溜息を漏らした。

「ああ、恐かった」

「恐い……?」

ダグラスは彼女の言葉に口の端をつりあげる。

「後ろめたい事でもあるの?」

「……嫌な子ね」

彼女に鼻で笑って続けた。

「あなたは要請外の人だから、ベリルと俺を含めて全部で53人だね」

「そうね」

空き地を借りてそこに仲間を集めた。

簡易テントが張られ折りたたみのテーブルが置かれて引き延ばし

た数枚の衛星写真とノートパソコンが乗せられた。

周りが落ち着いたのを確認しベリルが口を開く。

「集まってくれて感謝する。経験を積んだお前たちだが油断無きようにしてほしい。無駄な傷つけ合いも私は望まない。速やかに指示に従い、行動するように」

その言葉に皆が一斉にひと声上げる。ベリルは小さく頷きテープルの上の衛星写真に目を移して続けた。

前にいる傭兵たちも身を乗り出す。

「足下は気にする必要の無い場所だが障害物が多い。トラップには気をつける」

言って、カトの上空を映している写真の一角に指を当てる。そしてもう一枚の写真を取り出した。

サン・ディエゴアルトから北にあるカノという町に『シャイニー・ブレイド』の本拠地がある。さほど大きくは無い町だ。

映っているのは大きな敷地にある溶接工場。上空写真からでも稼働を止めてかなり経っている事が窺えた。

「廃工場とは奴らも考えたもんだな」

ワイトが感心するように発した。

「地下組織の常套手段じやうたうしゆだんだろ？　なんで今までここが見つけられなかったんだ？」

細く一重の草色の瞳と、赤毛が印象的な40代近く見える顔つきのヨアヒムがベリルに怪訝な表情を向ける。

「ここは悪ガキどものたむろ場所のようだね。それに騙されていたらしい」

「！　そいつらも仲間だったって訳か」

ヨアヒムが“なるほど”と納得した。街の郊外にある廃工場は人がほとんど訪れる事は無く少年たちのたむろ場所となっていた。

しかし、それは表向きの姿でその少年たちも組織の一員だったのだ。

「何人くらいだと思う？」とオルソン。

「建物の大きさから推測するとおよそ70名」

「多いな……」

ワイトが小さく舌打ちした。双方、それなりの損傷を覚悟しなくてはならない数だ。

「今回はどういった戦法を？」

「白昼戦となる」

オルソンの質問に答えたベリルを一同は凝視する。

「夜戦じゃないのか？」

ワイトの問いかけはもつともだ。暗闇に紛れて相手を叩く方が効率が良い。しかしベリルは昼間の戦いを計画した。

いくら相手が犯罪組織だといっても戦闘に慣れている訳じゃない。それとは逆にこちらは夜戦にも長けている傭兵の集団だ。暗視スコープを使い速やかに遂行出来る。

「理由はいくつかある。1つは確かに戦闘はこちらが有利だ。しかし表だった守りが出来ないのだよ」

「！？……そうか」

ヨアヒムの声のあとみんなが苦い顔をした。

エクアドル政府にとって犯罪組織は確かに邪魔な存在だがベリルたちに協力的ともいえなかった。

アメリカ政府との連携が影響しているともいえなくもないが、本来なら工場の周りに警官を配置していてもおかしくはないのにそれを一切、行っていない。

つまり――

『銃撃戦は許可し、多少の損害は不問とするが、政府は表立って関与はしない』

夜間の銃撃戦は視野が狭くなる。

市街地での戦闘で戦地との区切りを設けられない状態では住民に大きな危険が及ぶ可能性があるのだ。

「ある程度、避難を呼びかけるつもりだが……難しいだろう」

ベリルの表情も硬い。敵はすでに、こちらと全面対決の姿勢で構

えている。激しい戦いになる事は必至だ。

「思ったんだが……なんでここで？　もっとデカイ場所を集めればいいだろうに」

ヨアヒムが疑問を口にした。ベリルはそれに小さく笑う。

「すでに『オープン』を付けている。ここで我々を叩き移動するつもりなのだろう」

『オープン』とは、監視者の事だ。監視だけを専門にする会社がいくつか存在し、俗称としてそう呼ばれている。

簡単に言えば、監視している情報を依頼主に垂れ流す——依頼主がいなくなれば彼らも撤退するが、監視者を引き離すには戦闘を行いドサクサに紛れて移動する事だ。

広大な敷地内に建てられた施設や工場、倉庫……それらを相手も利用して戦いを挑んでくる。

戦闘には長けているが、土地勘のないこちらにはその部分において多少の不利となる。

「さて、問題だ」

ベリルは笑顔で工場の敷地上空写真を持ち上げてみんなに示す。

「どこから攻めると効率が良いかな」

すると一斉に声が上がった。

「南からだ」

「西からだろ？」

「違うつて！　北からだよ」

口々に写真を指さして答える。

「四方から同時に侵入する事は当然だが、重点を置くのは西だ」

一通り回答を聞いて自分の意見を述べると、西だと答えた数人がガッツポーズをとった。

敷地の周りにはぐるりと黒く塗られた鉄柵が張られているが、すでにあちこちが破れていて侵入は可能だ。

工場内に入る門は西と南に1つずつある。

しかし、出入りするものは西の門だ。よってその門の左側には警備

員が常駐する小さなプレハブがある。

そのすぐ先に警備員たちが寝泊まりする警備棟があり、その奥に第1倉庫がある。

溶接工場は東に位置していて南には巨大なタンクが2つ、熱を冷ます真水を入れていたものだろう。

外からでは工場内を窺い知る事は出来ない。ベリルが西と答えたのには単なる入り口だからではなく、ちゃんとした理由があった。

問題は西にある警備棟と監視塔だからだ。

「見取り図を見て推測していたが、先に監視させていた仲間からの映像だ」

ノートパソコンを開き何枚かの画像を示した。

「！」

監視塔にある小さな黒い物体、それは……

「監視カメラか」とオルソン。

「さすがにここにまでダミーを置く訳にはいかんようだね。カメラを設置したのだろう」

このカメラはスナイパーライフルで破壊したとしてもそれでバレてしまう。

「警備棟はその役目を果たしていると思っている」

「一番、敵が多いって事が……」

ワイトが小さく唸ってあごをさする。

「で、親分はどこにいますか？ まさか工場内って言うんじゃない……」

ヨアヒムが別の質問を返した。

「その“まさか”だよ」

一同がどよめきた。それに小さく笑って続ける。

「見た目に騙されてはいけない。人は影の部分を無意識に黒く塗りつぶしてしまうのだから」

「影の部分……？」

オルソンは工場内の暗い部分をじつと見つめた。工場の中…… 5

mほどから暗く影を作っていて中の様子はまるで分からない。

この画像も前にある2つのタンクが邪魔をして小さな隙間から映っているだけだ。

「!？」

オルソンはハッと気が付く。

「これは……影じゃなく壁か！」

「上手く隠している」

気が付いたオルソンを褒めるように発した。続いてヨアヒムが応える。

「この工場は……どこから陽が差ししても影なのか」

前にあるタンクが工場内に陽を差し向ける事は無い。果たしてこのタンク、建てられた当初からあったものなのかどうか疑わしかった。

「西の門がもつとも敵が多いだろう。2つのチームで突入する」

「……」

ダグラスはその様子をじっと見つめていた。わずかな事も見逃さないベリルを尊敬すると共に、彼のように自分もなれるのかと不安がつつのる。

解ってる……ベリルみたいな才能は自分には無い事くらい。彼は『自分のようになれ』だなんてひと言も言わない。

ただ『自分に出来る事をやればそれでよい』と言うだけだ。

でも……それはとても重たい言葉なんだ。だからたったそれだけを語る。俺に出来ることに限界は無いハズだ。いや、自分から限界を認めちゃいけないんだ。

何が俺に出来るのか、俺は何をしなければならぬのか……それを見極める事がとても大事なんだよな。

「ダグ」

「！」

ベリルの声にハッとする。

「何？」

「ヘッドセットの調整を手伝ってくれ」

今日はここで夜を明かし早朝に最終確認をしてカトに向かう。決行は午前10:00と決定した。

他のみんなも寝る準備に入っていた。銃の手入れをしている者や、寝る前の軽い柔軟をしている者と皆、それぞれに時間を潰していた。2人は大量のヘッドセットの調整を行う。

ダグラスは後部座席、ベリルは運転席で作業していた。

仲間が多いただけこの作業も増えてダグラスはげんなりした。そんな少年の姿を一瞥して小さく笑う。

「ちまちました作業ねえ」

ピックアップトラックの中で作業しているベリルたちをスーザンが窓からのぞき込む。

「こういう処が大事なの」

ダグラスは言い聞かせるように発した。そんな少年に苦笑いを浮かべて、なんの反応も示さずに作業を続けるベリルに目を移した。

「10個ずつに分けてるの？ として？」

「チームごとに分けてるんだよ」

ダグラスが代わりに応えようとスーザンが少しムツとしたような顔をした。

ベリルの分析なんかさせてたまるもんか……と軽く睨み付けるスーザンにニコリと笑った。

彼女がベリルに近寄るのはその能力を詳しく分析してそれを自分たちに活かせないかと考えているからだ。

CIAは自国の利益優先で動く組織である。それが正義か悪かなど関係無い。

本当はベリル自身を取り込みたいって感情が見え見えなんだよ……

…と少年は笑顔の下で攻撃の念を送っていた。

* 思う処

ベリルもそれは解っているようで彼女の言葉にはほとんど応えなかった。

たぶん今までも同じような事が何度かあったんだろうな……と、ダグラスは薄笑いでスーザンを見つめる。

ベリルの戦闘センスをデータ化したがる人は多いと思う。

依頼成功率が異様に高く、誰も彼の先を見通すことが出来ない多様性に富んだ指揮はとても真似が出来ない。

でも、データ化してもきつとベリルならさらにそのうえに行く気がする……少年はそんな事を考えながらヘッドセットの調整を続けていた。

「はあ、やつと終った……」

10個ずつに小分けにされたヘッドセットを隣のシートに置いて伸びをした。

「お疲れさん」

ベリルが笑って炭酸飲料を差し出し嬉しそうにそれを受け取って勢いよく喉に流し込んだ。

炭酸の弾ける刺激が喉に痛いほどだが、疲れが飛んでいくようだった。

「プハッすつきりした」

ぐいと手の甲で口を拭う。彼はそれを見ながら自分たちの分のヘッドセットを調整し始める。

ベリルのヘッドセットだけは皆とは少し違う。

総指揮を行うためボタンの数が多い。ボタンの組み合わせによっても色々あるようで、聞いた事があるけど把握出来なかった。

今回のヘッドセットにも3つのボタンが付いている。

* 遺伝子は語る

ボタンの組み合わせで3つ以上のチームと別々に会話出来るように今回はしているんだけど、本来のヘッドセットでもっと大きいんだよね。

こんなコンパクトなヘッドセット使うのってベリルくらいのもなんだ。

だから、初めてベリルの要請を受けた傭兵がこれを受け取ると必ず驚く。今回も調整してるヘッドセットを見て何人が驚いてた。

「はあゝ疲れた」

そんな事を考えながら車の外に出て星空を仰いだ。

「ダゲ」

「！」

スーザンが声をかけてきた。

まだ懲りてないのかと思ったダグラスだったが、なんとなく愁いを帯びた瞳に引き込まれそうになる。

ピックアップトラックの荷台にもたれかかっている彼の隣に同じように荷台にもたれかかって宙を見つめた。

「あなたたちが私を嫌うのは仕方ないわ。私だって間違っていると思う事もあるもの」

「！」

意外な言葉が聞かれて思わずスーザンを見つめた。

「ベリルを取られたくない？」

「……」

何も言わずに眉間にしわを寄せる少年から目線を外して小さく笑った。

「そうよね。今はあなたのお父さんだものね……父親を取られたくないのは当たり前……」

「違っよ」

「！ 違う？」

聞き返したスーザンから目を外しペットボトルを傾けたあと続けた。

「ベリルは俺だけのものじゃない。ここにいるみんなの、ううん誰のものでもないよ。だから独り占めしちゃだめだよ」

苦笑いで応える。彼女はその表情に柔らかに微笑み返す。

「みんな、彼が好きなのね」

ダグラスはその表情にドキリとした。大人の女性がかもしだす色気に、クラリ……とくる。

「子どもを誘惑するのはやめてくれんかね」

「！」

2人が声の方に顔を向けると、車内からガラスを降ろしたドアに片肘をつきその上に頭を乗せ目を据わらせているベリルがこちらを見ていた。

「誘惑だなんて人聞きの悪い」

ニコリと笑うスーザンに薄笑いを見せる。

「ならばそのコンタクトを外してくれんか」

「！」

「コンタクト？」

眉をひそめて彼女に視線を移す。

「じゃあまたね」

スーザンはそそくさと立ち去る。

「今のどういう意味？」

首をかしげてその後ろ姿を見つめたあとベリルに問いかけた。

「誘惑する時に使うコンタクトがあるんだ」

言いながら目を示す。潤んで見えるように作られているらしい。

「……くそ」

悔しそうな少年に少し呆れて小さく溜息を吐き出す。

「セシエルも女性には弱かったよ」

「！ 父さんも？」

そういえばベリルと出会ったのも勘違いした依頼からって言うだけ。その依頼主が女性だったのか……こんな遺伝、嫌だなあ。ダグラスはがっくりと肩を落とした。ベリルはそれに小さく笑って窓を閉めながら発する。

「早く寝ろ」

「はい」

早朝——この街で最後の打ち合わせが行われた。

「チームを5つに分ける」

言いながら数枚の紙を手渡していく。みんなはそれに目を通して隣に流していった。

「左からAに別れてくれ」

指示に従い、およそ10人ずつがひと固まりになった。

「Aには私とダグラス、スーザンが加わる。よってBとCは11人の編成だ」

A班はベリルも含めて11人となるが、総指揮を行うベリルはAだけに集中出来ないため数には含まれない。

「Aはダグラス、Bはワイト、Cオルソン、Dヨアヒム、Eはノリスをチームリーダーとする」

金髪に青い目、30代半ばの細身の男がベリルに軽く挨拶した。ノリスだ。

「AとBは西から、Cは北、Dは東、Eは南から侵入」

一端、言葉を切り確認してまた続ける。

「最終ターゲットはサティム。必要以上の攻撃は避けるように」

サティムという人物の顔写真を流していく。クセのある黒髪と彫りの深い顔立ちにダークグレーの瞳。40代後半に見える。

「今から20分後に移動する。チェックは済ませておけ」

言って終わりを告げるように軽く左手を挙げると一斉に動き出した。

「！」

スーザンが珍しそうに見回している事に少年は気がついて問いかける。

「どしたの？」

「傭兵だけの戦闘って初めてだから」

ダグラスは、ああ……と小さく声を出して続けた。

「まあ、俺たちとしては気楽だよ。やっぱ軍人さんとか一緒だと険悪になることもあるし」

街の警察とFBIが仲が悪いのといっしょ……と肩をすくめて皮肉混じりに発した少年にスーザンは苦笑いを浮かべた。

「！」

そして、顔を近づけてじっと見つめてきたダグラスにドキリとする。少年はニツと笑った。

「ホントにコンタクトだったんだ」

「！」

ハツとして背中を少しのけぞらせた。クツクツと押し殺したように笑うダグラスに、からかわれた事を知ったスーザンはムツとなる。

「後ろから撃たれるなんて、止めてよね」

「！ 私は敵じゃないわ」

遠ざかる少年の背中を見つめてスーザンは溜息を漏らした。

「あなた、どういう教育してるの？」

「何の話だ」

ピックアップトラックの荷台に荷物を積み込んでいるベリルにスーザンが腹立たしげに発した。

「大人をからかって……」

荷台に背中を預け腕を組む。その姿にクツと喉から笑いを絞り出し、作業を続けながら言い放った。

「奴ももう立派な大人だよ」

「！ あなたに比べればヒョッコなんじゃないの？」

皮肉混じりの言葉に反応を示さず彼女にタクティカルベストを手

渡した。

「誰とも比べられん。ダグはダグだ」

「は、あなたらしい回答ね」

スーザンはベストを持って後部座席に乗り込んだ。

ここからカトはそう遠くない。決行の時間の10時には余裕で到着する距離だ。それぞれジープやピックアップトラックに乗り込み移動を開始する。

そうしてカトに到着し、廃工場から南数十メートルの広場に集合した。ベリルを中心として円を作り腕時計に手をかける。

「時刻合わせ。3……2……1」

一斉に時計のボタンを押す。そして自分たちの車に戻り最後の装備チェックを始めた。

ベリルは後部座席のドアを開き着替えを始める。草色のカーゴパンツにアサルトジャケット、右太ももにはレッグホルスター。

すっきりとしたタクティカルベストを装着し、左腕に鞆なげの付いたベルトを巻いてそこにナイフを仕舞う。

左手首の裾を上げてスローイングナイフ（投げ用ナイフ）をベルトに仕舞った。

腰のベルトにはバックサイドホルスターが2つ。そこにも銃の他にナイフが仕舞われている。

「……」

他にも隠し持っていそうで見ていた仲間たちは身震いした。

ベリルは最後に淡いメタルグリーンのヘッドセットを手に乗せてチェックする。確認し終えて装着し指示を伝えた。

「各班は指定の位置に」

車は散り散りに走っていく。ダグラスは助手席に座り後部座席のスーザンを一瞥した。

廃工場の西10m付近で車を駐める。A班とB班の仲間が集まり

工場の門を見据えた。

「やっぱり、いるな」

「うむ」

遠目からでも見える人影にワイトがつぶやく。

このまま突っ込むのではなく、まず牽制程度に発煙筒を投げ込む手はずだ。四方同時での決行で敵の分散を狙う。対峙する数をほぼ同じにする事で侵入しやすいようにした。

一方に集中させる事も考えたが、それではこちらの戦力もかなりの差を作らなければならない。

同じだけの戦力に別れて侵入した方が効率が良い。

「……」

ダグラスは腕時計に目を落とす。決行の時間まで……あと数分。

緊張が辺りを満たしていく。ライフルを手にして、ワイトたちは門に駆け込む準備をした。

ベリルが腕時計を見つめ秒針が真上に来るのを待つ。

「……決行」

一斉に走り出す――

*こぼれ落ちたものは

ワイトが一瞬、立ち止まり大きな銃口のハンドガンを前方に向けひきがね引鉄を引いた。

ゆつくりとした軌道を描き、それは門の中に入っていく。発煙筒の青い煙が風にまかれ視界をさえぎる。慌てたのは中にいる人間たちだ。

向かってくる相手が見えないのでは攻撃のしようがない。敵が焦っている間にベリルたちは間合いを詰めた。

「散開」

ベリルがそう言うと、まとまって駆けてきたAとBチームは中心にいるベリルを残し広がった。

「くっ、くそ！」

視界の悪いなか門の中の男たちは近づいてくる気配に前方にライフルを撃ちまくった。ベリルはそれを確認し閉じられている門に手をかける。

「……っ」

時折、横をかすめる銃弾に眉をひそめながら構わずに力の限り左に引いた——門はゆつくりと車輪をきしませて開いていく。

「門が!？」

それに気付いた男たちは門に向かって一斉射撃。が、あちこちから放たれてくる銃弾に前方だけに集中出来ずにいた。

ある程度まで開いた門に吸い込まれるように入っていく。

「くそ！ 退けっ」

男たちは左の警備棟に入ってしまった。

「Bは警備棟へ」

<Cだ、倉庫に入る>

<Dだ。工場の裏手にいる。ここからの侵入は無理そうだ>

<E、工場の入り口に敵が多い。タンクを盾に交戦中だ>

タンクの前は駐車場になっていて使われなくなつた10tトラックが並んでいた。

「そろそろ警備棟から敵が来る頃だ。Eは一端、後退しトラックを盾にしろ」

<了解>

警備棟には出入り口が2ヶ所ある。その1ヶ所からB班が侵入し中を攪乱している。別の入り口から、予想通り敵が出てきた。ざつと数えて20人……銃撃は激しくなる。

「ぐっ！」

「！アレン！」

撃たれた仲間にノリスが駆け寄つた。

「アレンが撃たれた！」

<西門へ>

「……」

エメラルドの瞳を見開き門のプレハブの前で様子を窺う。全体を見渡す事は出来ないがその空気を探っていた。

しばらくすれば乱戦となるだろう。相手には統率性はない、散り散りになって処構わず撃ちまくってくる。

乱戦なれど、チームごとにまとまっているこちらに武がある。

しかし、問題は工場内に侵入した時だ。相手は籠城覚悟（じちじき覚悟）だろう。

「……」

ベリルは相手の数を大体で計る。30人ほどであると予想した。では、残りの約40人は工場内か……時間をあまりかけたくはない。工場の裏手にまだDチームの数人があるハズだ。

「ヨアヒム、二手に分かれて左右から攻撃」

<了解>

少しずつ包囲を狭めていく。

「く……っ」

敵も敗北の気配に焦りを感じていた。

中の仲間は……助けには来ないだろう。半ば絶望感に襲われ生きている事が馬鹿馬鹿しく思えてきた。

いつそ出て行って撃ちまくってやろうか——敵がそんな意識を過ぎらせた刹那、ベリルが静かに指示を下した。

「撃ち方止め」

「!？」

いきなり銃撃が止み、敵の男たちも引鉄をゆるめた。

「そのまま待機」

言ってゆつくりと前に出る。当然のごとく敵の男たちは彼に銃口を向けた。

「これ以上の抵抗は無駄だと感じているハズだ。意味のない殺し合いはこちらの望む処ではない」

男たちに目を向け、聞こえるように少し声を張り上げて説得を開始する。

「だっ、黙れ！」

「！ベリル……狙われてるぞ」

トラックから様子を窺っているオルソンが監視塔にいるライフルを持った男を見つけた。

「……ベリルは気付いてるよ」

同じく影から様子を窺っているダグラスが応えてベリルの指示に従うように促した。

「警戒する必要は無い。我々は——」

響く銃声と共にベリルが何かに突き飛ばされたように一瞬、体を強ばらせる。

「ベリル！」

口々に仲間たちが叫んだ。

敵は「やった！」というように大きく口角を吊り上げたが……その表情は一変する。倒れないベリルに目は見開かれた。

数秒後、監視塔にいた人間はこちらの狙撃で落ちていく。

血のにじむ胸を押さえニヤリと笑うと恐怖でライフルとショットガンを手から離れた。ガシャガシャという音があちこちで響き外側の制圧完了を知らせる。

「大丈夫？」

「大丈夫なものか」

駆け寄ったダグラスに苦い顔をして、口から流れている血を手の甲で拭った。

『抵抗し続ける彼らへの最後の脅迫』

そのための“駒”として監視塔からの狙撃をそのままにした訳だが……相変わらず思い切った事をする。

ダグラスは呆れて溜息を漏らした。

仲間たちも苦笑いを浮かべる。不死だとは知っていても、目の前で直に見た仲間の数人は開いた口がふさがらない様子だ。

心臓を撃ち抜かれが思ったほどの出血量じゃないのは驚異的な治療能力のためだろう。

「態勢を立て直す。各チームはまとまって準備を開始」

<アイ・サー！>

敷地内はすでにベリルたちの占領下だ、これで戦闘区域は区切られる事になった。とはいえ、工場内に入れないのでは外に被害が出る可能性が無いとは言えない。

「どうだ」

工場内を双眼鏡で探っている仲間に声をかける。

「壁の内部……かなり入り組んでいるかもしれん」

「ふむ……」

少し思案して、チームごとの動きを確認している仲間たちを見回す。

「レンジャー経験のある者は何人だ」

ヘッドセットからの声に、みんながベリルに顔を向けて何人かおもむろに手を挙げた。各チームにいる事を確認し言葉を続ける。

「リーダーのサブとして意見を頼む。気が付いた事があればリーダ

ーに意見してもらいたい」

ここで言うレンジャーとは野戦に長けた者の事だ。

森林、山岳地帯、ジャングル……それらに精通する者は地形を活かす戦い方を知っている。

市街地であるにもかかわらず、ここだけはまるで入り組んだ迷路のようにベリルたちを待ちかまえていた。

捕まえた男たちの手足を縛って動かないトラックの荷台に詰め込みドアを閉める。相手の死者は3人重傷者が5人、こちらは重傷者1人軽傷者が3人。

被害はまだ少ない方か……ベリルは思っ、工場の入り口に目を移した。

外側の工場外壁から数メートル内部に黒い壁がある。金属製の扉が見えるが、1ヶ所だけのハズがない。

「俺たちが先に突入する」

「！」

ワイトが工場に親指を差して提案した。それに眉をひそめるがワイトは苦笑いを返した。

「そのつもりでBを編成したんだろう」

「そうだ」

ワイトに感心したような声を上げる。彼自身レンジャーとしても優秀だ。ベリルは彼能力を買っている。

「……頼む」

しばらくワイトと目を合わせ結論した。

「目的は敵のあぶり出しだ。無理はするな、戦闘は主に外で行う」

「了解」

ワイトは散弾銃ショットガンを手にした。

使用する弾薬は『バードショット』。数十〜数百個もの小さい『ペレット』と呼ばれる金属の弾が撃ち出されるものだ。

因みに、ショットガンは銃口を口径ではなく「番経」もしくは「ゲージ」と表す。使われる弾薬も特殊だ。

今回は相手に当てる目的ではなく、その音で驚かせるために使用する。

他のメンバーはハンドガンを手にした。狭い室内戦にライフルは不向きなのだ。

「報告は怠るな」

「ああ」

ワイトたちはベリルに軽く手を挙げ工場に向かう。

しばらくして銃声が鳴り響く……ベリルの表情はいつになく苦い。
「……」

ヘッドセットから聞こえてくるワイトの声とショットガンの音に口を開く。

「ワイト……一端、退け」

＜もう少しだ！＞

「命令に従え、ワイト」

＜もう少し待ってくれ……＞

「……っ」

それに応えようとした刹那——ヘッドセットから爆発音と同時に工場がズシンと揺れた。

「ワイト！」

左耳を押さえて彼の名を呼ぶ。数秒して苦しげな声がかすかに発せられた。

＜……っ。準備、してろよ＞

「！よせっ」

片膝をついているベリルが顔を上げた。彼の耳に小さな金属音が聞こえたからだ。

“ズシッ……”

2度目の地鳴り。ベリルは口の中で舌打ちをして目をつり上げる。
「攻撃態勢。来るぞ」

一斉に構えられるライフル。

向こう側の入り口から次々に出てくる人影がこちらに気付いて無数の銃弾が激しく浴びせられる。

「少しずつ追い詰める」

言ったあとベリルはこうべを垂れた。タンクについていた手を握りしめる。

「あとで……迎えに行く」

「！」

今の言葉はワイトに言ったの？ 生きていない相手に……？ そばにいたダグラスは聞こえた言葉に一瞬、驚いた。

ダグラスはワイトが彼の教え子だった事を後に聞く。ベリルは彼にレンジャーの技術をたたき込んだ。

命は彼の手のひらから虚しくこぼれ落ちていく……

「……」

どこか非現実的でいて確たる存在であるかのように、ゆらりと立ち上がるベリルの姿に魅入る。

「ぐあっ！」

「！ ジャン」

近くにいた仲間が銃弾を受けた仲間^{のち}に駆け寄った。

「あ……」

傷ついていく仲間を呆然と見つめる。

「ダグ、何をしている」

「ハッ！？」

低い声が自分の名を呼び振り向くとエメラルドの瞳が冷たく見つめていた。

*横たわる修羅

「今は戦闘中だ。気を抜くな」

「は、はいっ」

ライフルを手に持ったダグラスを一瞥し銃弾を受けた仲間を目を移す。

「ダグラス」

「！ はい」

「ジャンを連れて下がれ」

「え？」

足に弾を受けたジャンを側の仲間が必死に引きずっているが1人では大変そうだった。

「……解った」

ライフルを肩にかけジャンに駆け寄る。苦笑いで見せるジャンの青い瞳には複雑な表情が浮かんでいた。

それは怪我をしてしまった事への自責の念なのか、自分を助ける事で戦力が減る事への悪い気持ちなのかは解らない。

仲間とダグラスとで両肩を抱え後方に下がる。西門の近く、トラックを盾にして怪我人の応急処置を他の仲間が行っていた。

「！？」

目の当たりにした光景に少年は目を見開き言葉を詰まらせる。

「こんな……っ」

怪我人は5人や10人処じゃない。ざっと数えても20人以上はいた。

「いま前線には何人いるの！？」

怪我人の治療をしている仲間に問いかける。

「……おそらく20人くらいだ」

「！」

半分以下だなんて……！ 愕然とする。

「……」

背後から聞こえてくる銃声と目の前の無数の怪我人——これが……現実か！ 戦いに大義名分などありはしない。そこにあるのは生と死だけだ。

だめだ、目をそむけるな。現実から逃げちゃいけない……ベリルの作戦ミス？ 違う、ベリルだからこれで済んでるんだ。

住人たちに被害が及ばないように仲間たちが必死に戦っているんだ。

『傷つかなくて済む者を護ること』

そうでなければ自分たちのいる意味が無い。

そのために……仲間たちはいま戦っているんだ。

「ダゲ」

男が少年の名を呼ぶ。

「行けるか？」

ニヤリと笑い訊ねられる。

「……」

ダグラスは数秒その無骨な顔を見て同じようにニヤリと笑って返した。

「とうぜん」

ライフルを持って足早に戻っていく。

多分みんなこうなる事を知っていたんだ……だけどこれ以上の数は増やせなかった。誰も死にたい訳じゃない、だから必死に生きようと戦ってる。

「！」

戦場に戻ると、先ほども仲間たちが包囲を狭めていた。ベリルを探すと彼はライフルのスコップを覗いて狙いを定めていた。

引鉄を引くと向こうの敵が大きなりアクションで倒れる。それに警戒して敵は少し体を壁に沈めた。

「チッ」

ライフルを投げ置き、怒りを帯びた声色で発する。

「5分でケリを付ける」

言って左耳を押さえると最後の指示をくだした。

「徐々に接近。油断するな」

それを聞き少年は意を決したように飛び出す。

「ダグラス！」

それに手を出して制止したが、するりと抜けて駆けていった。

すでに敵も味方もバラバラで混戦状態……敵の生き残っている人数も見当が付かないほどだ。

だが、こちらと同じくらいだという事は窺えた。

「……あのバカ」

ダグラスのあとを追う。銃弾が飛び交うなか少年の気配を探った。

「！」

少年の後ろ姿を見つけたとき——彼に向けられた銃口も視界に入る。

「ダグラス！」

「！？」

それに気付いた少年の前に影が飛び出した。相手の弾がその影の胸を貫いたと同時に敵を道連れにする。

「ローランド！」

少年は崩れ落ちるローランドに駆け寄る。男は少年の顔を見て絶え絶えの呼吸で笑った。

「……大きくなつたな」

「喋っちゃだめだよ！」

泣きそうな声をあげ彼の状態を見るベリルに目を向ける。

「……」

撃たれた場所と彼の状態に苦い表情を浮かべた。

「うそだ……」

「よう、ベリル」

「喋らないでっ」

ダグラスを一瞥し構わず続けた。

「すまなかったな……あんたと対立する事が、奴らに信頼される一番の早道だったんだ」

ベリルはそれに小さく笑う。それに笑顔返してダグラスを見つめた。

「無鉄砲なガキの世話つてのは、大変だな……」

涙を浮かべている少年の頭に乱暴に手を置く。

「気にすんな」

「……っ!？」

言つて、するりと手が落ちていく——ダグラスは目の前が真っ白になった。

「右から攻めろ」

それを視界に捉えながら指示を発する。

「うそだ……」

呆然と宙を見つめて頭を横に振り、転がっているローランドの胸ぐらを掴んだ。

「ベリルと対立しても死ななかったじゃないか！　なんでっ……あんな奴に殺されるんだよっ！」

「ダグラス」

少年の背中に手を添えると、その手を振り払って声を荒げた。

「ベリル！　なんとかしてよっ。ベリルは……怪我の治療も出来るんじゃないかっ」

涙を一杯に溜めて張り上げ、動かないローランドに再びすがりついた。

「……僕のせいだ」

「——っ」

ぼそりと言った言葉にヘッドセットを乱暴に外し少年を振り向かせ抱きしめる。

「そっじゃない！　違う。お前のせいではない」

「……っベリル」

壊れそうな自分を支えてもらいたくて、必死にベリルの背中に腕を回した。

「ローランドは自分の意志でお前の前に出た。決してお前だけのせいではない」

ダグラスの脳裏に甦るかつての記憶……父親に殺されかけた記憶は深く心に突き刺さっていた。

『だって……僕は知らない人間なんだから』

薄く笑って言ったその時の言葉はベリルの心までもを締め付けた。落ち着いてきたダグラスから離れその額にキスをする。

「己のせいで誰かが傷つくのを恐れるならば強くなれ。誰かを救いたいと願うなら優しくあれ」

それが、私とローランドの願いだ……

「彼の死を越えていけ」

少年に発してヘッドセットを装着し戦いを終らせるため最後の言葉を放った。

「今夜の酒を選んでおけよ」

<イエッサー！>

耳が痛くなるほどの仲間たちの大きな声に少年は苦笑いを浮かべライフルを握りしめた。

「彼を頼む」

「！」

すでに戦いは終りを告げていた。

彼はダグラスにローランドの遺体を運ぶように指示をする。

「……解った」

重そうに背中に背負い運んでいく少年をしばらく見つめたあと、その瞳を陰しくして歩いていった。

その先にいたのは組織のトップ——サティムだ。

汚れたコンバットジャケットに疲れた表情、クセのある黒髪は激しい戦闘を物語るように乱れていた。

地面にへたり込み、銃口をいくつも向けられている。

「!」

ダークグレーの瞳が目の前に立った影を見上げた。

「……貴様か。化け物め」

その言葉にさして興味も無いように、無表情にしゃがみ込み目線を合わせる。そんなベリルに最後のあがきを見せるように勝ち誇ったような声を上げた。

「貴様は死なない。だからそうやって平然としてられるのだ……周りを見てみる！ 一体、何人が死んだと……」

「こいつ殴っていい？」

ぼそつと発したノリスにベリルは肩をすくめる。オルソンは豪快に笑い、かがんでサティムにニヤリと笑う。

「違うね。ベリルだから俺たちは命を張れるんだ」

「なに……？」

男が周りを見回すと彼らの表情はその言葉が当然のように笑みを浮かべていた。

「言いたい事はそれだけか」

一度、目を閉じて輝くエメラルドの瞳をサティムに向ける。

「うつ……」

笑った顔に背筋が凍って絶望感が心を支配した。そしてサティムを拘束し撤退の準備を進める。

「知らせなくていいのか？」

オルソンの言葉に外に厳しい視線を向けた。

「放っておけ。どうせ見ていただろう。勝手に回収に来るさ」

ベリルはそう言っただけで周囲を確認する。

「撤収だ」

仲間たちは一斉に声を上げ、戦いの終わりとその勝利を喜んだ。

少年はその様子を小さく笑って見つめる。そしてふと、スーザンの姿が見えない事に気が付いた。

「……」

並ぶ遺体に眉をひそめエメラルドの瞳を曇らせる。そして毛布を被せられたワイトの遺体の前にしゃがみ込む。

「無茶をしておって……」

「……」

絞り出したような声に少年はその背中を見つめた。

「ベリル」

かけられた声に彼は振り向かず、もはやワイトの面影すらも残らない遺体の胸に手を置いて目を閉じる。

「私よりも早く逝く奴があるか」

無表情にも切なげにも聞こえるその声色は、彼の限らない哀しみを表しているように少年には感じられた。

それは彼の今の年齢、52歳よりも早く死んでしまった事を意味していた。

長生きの出来る仕事では無い事は解っている。それでも出来る限り生き続けて欲しい。そんなベリルの願いはいつも悲しい終焉を迎える。

遺体の前で片膝をつき、うつむいている姿はいつも強いベリルを弱しく映す。

「……」

ダグラスはただじっとそれ見つめているしかなかった。

「あなたの能力、見せてもらったわ」

バイクにまたがるスーザンが工場を遠くに眺めてつぶやき、口角を吊り上げて走り去る。

そうしてダグラスの初めての大きな戦いは苦いものと終った――

*先に進む絆

あれから1ヶ月が経ち、ダグラスの日常は落ち着きを取り戻す。

きつとベリルはあの戦いで俺に現実に見せさせたんだと思う。まだ傭兵に対して格好いい憧れを抱いていた俺の心の奥を見透かして『戦いなど綺麗な訳がない』と見せつけられたような気がした。

それでも傭兵になる事は止めない。ベリルもそれを反対はしない。決めるのは自分自身だ」とベリルはそう教えてくれたから……

これが本気じゃなかったら、きつとベリルは反対してたと思う。全てを見透かすような瞳を決して騙せない。

時々、やっぱり親の事とかローランドの事を思い出して1人で震える事があるけれど、ベリルは必ず側に来て何も言う訳ではないけど落ち着くまでいてくれる。

少しずつだが、少年は心の傷を癒していった。

そのエメラルドの瞳そのままに……ベリルは静かに優しく、心に手をさしのべる。父であり、師である彼とダグラスとの間には強い絆が結ばれていく。

* 踏み出した足

大学生活も楽しく過ごし2年で卒業を考えていたが、結局は3年かかってしまった。

ハイスクールの時に仲良くなったハリーとは今でも友達だ。時々、うちに来てベリルの言葉を目を輝かせて聞いている。

あと5年もすれば彼が年を取らない事に気が付くだろうな……なんて今から気を揉んでいるけど、なんかハリーなら大丈夫な気がするの不思議だ。

大学を主席で卒業した俺なのに、少しもベリルに敵わない……悔しいが仕方ないか。

ベリルは俺の顔を見て時折、懐かしいような表情を浮かべる。それほどに父親のセシエルとの絆は深かったのだと知った。

そんな父に俺は感謝している。その出会いが無ければ今頃どうなっていたか解らない。一度も見た事の無い父だけど、顔だけは知っている。確かに俺にそっくりだった。

引退したハンターたちに話を聞くと「尊敬出来る人物だった」と語ってくれる。誇れる父だったのだと嬉しかった。

そうして月日は過ぎてダグラスは20歳を迎えた――

「ベリル。相談したい事があるんだけど」

リビングのソファでハンドガンの手入れをしていた彼におもむろに切り出した。

斜めの1人がけソファに腰を落としベリルに目を合わせる。神妙な面持ちのダグラスに手を止めて言葉を待った。

「俺……他の傭兵にも技術を学びたい」

それに、彼はさして驚くこともなく緩やかな笑顔を向けた。

「相手は決めているか」

「え……ただだけ」

それを聞くと閉じていたノートパソコンを開き、ファイルの1つを開いてダグラスに示した。

「！……これ」

そこに書かれていたのは傭兵の名前だった。しかもダグラスが苦手とする山岳地帯における戦闘のエキスパートたち。

目を丸くしているダグラスにベリルはただ静かに微笑む。

「……」

なんてこった……ベリルは初めから見抜いていたんだ。いつか俺がそう言う日をずっと待ってたんだ。

『多くの者から学び取れ』

学び方には人それぞれ個人差がある。ベリルはいつもそう語る。だからダグラスに沢山の仲間を紹介し彼らの戦い方を詳細に説明した。

ベリルは全ての戦闘においてエキスパートだが、彼1人から学ぶのには限界がある。より多くの学びを吸収したければ、多くの者と関わることだ。

「じゃあ……誰が俺にはいいかな」

「ヘインズはどうだ」

細かく説明される彼の特徴と傾向……ダグラスは映し出されているデータと彼の説明を聞きベリルの横顔に目を移した。

「！……どうした」

ダグラスの視線に気が付いて少し眉をひそめる。

「ありがとう。父さん」

苦笑いを浮かべてぼそりとつぶやいた。

「！……」

父さんと呼ぶのは多分これが最後だろう。ベリルから離れたらそう呼ぶ事は出来ない。

「……」

彼は口の端を吊り上げて照れたようにダグラスの頭を軽くこづいた。

それから1年ごとに師を替えて25歳で独り立ちを果たす。

「！」

ダグラスが家に帰るとドアの横に荷物が届けられていた。

「？」

相手の名は無かったが、箱に描かれたマークでベリルだと気づき怪訝に思いながら箱を開ける。

「！これは……」

中に入っていたのは、数十枚のバンダナ。そのバンダナの端に染められているマークはドラゴンの翼に剣。

「出来たんだ！」

1枚を広げて嬉しそうに眺めた。傭兵たちの中には自分を示す『エンブレム』を持つ者がいる。

ベリルもその1人だ――刃を上に向けたその柄に1対の翼、その後ろにあるのは盾を簡略化した図。それがベリルのエンブレム――ダグラスは独り立ちする時にエンブレムを作る事を決めていた。

ベリルにそれを頼んでいたが、その出来栄えに彼は満足した。

ハリーからは今でも何度か電話がかかってくる。ヨットレーサーになる夢は今でも挑戦し続けていて、「無理かもしれない」と諦めかけてはいるようだ。

それでも彼は両親の反対を押し切って進んだ事に後悔はしていないようだった。ベリルの話も出てくるけど、歳の話は一度も出てこなかった。

まあ……ベリルの周りの住人があの通り普通にしてるんだからハリーが騒いだって「むしろ自分がおかしいのだろうか？」となってしまうのも当然かもしれない。

ただひと言、彼が明るい声で言った言葉に今思えば吹き出してしまふ。

＜死ぬまで人生について相談出来る相手がいるってのは幸せだよな！＞

電話の向こうの声にあの時は啞然とした。彼なりの受け止め方だったのかもしれない。

ミーナとも年に数回は電話で会話を交わす。あの時の感情は今でも覚えているけど、やはり彼女に俺の世界を見せるイメージは無い。いつか、そんな相手が目の前に現れるのかな？　そういう予感は今のは無い。仕事で手一杯という事も理由の1つだけど。

そんな時がきたらベリルに紹介してみようかな。色恋沙汰にとんとん“うとい”くせして、彼の目は確かだから。

「なあ、あんたダグラス・リンデンローブだよな」
「！」

空港の待合所で突然に声をかけられる。

南米での仕事を終え、ニューヨークにある家に帰ろうかと伸びをした処だった。声のした方に振り向くと、アジア系の顔立ちの男がそこにいた。

同じコンバツトスーツに身を固めている。どうやら仲間の1人だったらしい。

「正しくは、ダグラス・リンデンローブ・セシエルだけど。あんたなに？」

付け加えるように不満げにつぶやいた。

「俺、アキト・セラ。よろしく」

「……」

差し出された手を一瞥しダグラスより若干、高い世良アキトと名乗った男の顔を見た。

26歳になったダグラスは178?まで伸びた。時々、同じ仕事になるベリルを上から見られる事は少し嬉しい。その存在感には、相変わらず呆れるくらいだけど。

「よろしく……」

差し出された手を握り返し彼の表情にいぶかしげな表情を浮かべた。どこか期待しているような輝く瞳がじっと見つめている。

「なあ、今いくつ？」

「え、26だけど」

「俺と同じだな」

ニカツと笑う齒が光る。ダグラスはますます眉をひそめた。

「俺、日本人なんだ」

「へえ、そう」

関心も無く軽く応え搭乗口に足を向ける。それでもアキトという人物は後ろから追いかけて会話を続けた。

「仲良くしようぜ。若者同士さ」

「……」

屈託のない笑顔が降り注がれる。そんなアキトに目を据わらせた。今までにも何人かこうしてダグラスに声をかけてきた者がいたが……その理由を彼はよく知っている。

きつとこいつも同じような理由だろう。思つて、あしらうように

ニコリと笑顔を返す。

「じゃあ、これで」

「おう！」

意外と素直に折れた。少し拍子抜けしたが「まあいいや」と肩をすくめる。

「や！」

「……」

隣のシートに明るく挨拶をするアキトが座っている。

「なんのつもり？」

「偶然だよ」

こんな偶然あるものか……ダグラスは思い切り眉間に縦じわを刻んだ。

しばらく沈黙が続き――

「な……」

「うちに来ても何も無いよ」

言いかけたアキトから言葉を奪う。しかし彼は満面の笑顔を浮かべた。

「えっ、家に行つていいの!？」

「エ……? いや、そういう意味じゃ」

やぶへびだ……頭を抱えた。アキトは家に来るき満々で子どものように喜んでいる。

今更「だめだ」とも言えずに、深い溜息を吐き出した。

アメリカ合衆国ニューヨーク州。メタルグレーのピックアップトラックを郊外まで転がす。

「おゝ、いいうちじゃん」

芝生の庭を眺めながらダグラスの後ろをついていく。

「普通だよ」

白いドアを開いてアキトを中に促す。小ぎれいにされている家中はどちらかといえばあまり生活感が無い。

「!」

ダイニングキッチンと続きになっているリビングには大型の液晶テレビと高級なソファが2人がけ用が1つと両端に1人がけのソファが1つずつ並べられていて、ガラスのリビングテーブルが品の良さをさらにアップさせていた。

「……」

賃貸マンションの俺とは大違いだな……心の中でつぶやいた。

「部屋はあといくつあるんだ？」

「ん?」

ここに戻る途中でスーパーマーケットに立ち寄って買った食材を冷蔵庫に詰めながら答える。

「2階に寝室と2つ部屋がある」

アキトはそれに口笛を鳴らした。

「日本が狭いだけ」

「言ってくれちゃって」

話してみるとアキトとは気が合うようだった。

「！　へえ、自衛隊にいたんだ」

ジューズからいつの間にかウイスキーに代わり2人はグラスを傾けていた。

「なんで辞めたの？」

「んゝなんか……」

アキトは照れたような笑みを浮かべて頭をポリポリとかく。

「俺のやりたい事じゃないな。って思ったんだ」

確かに自国を護る事に誇りは持っていたけど、自分に出来る事は別にあるような気がしていた。

「そんな時にさ……」

「ベリルの名前を聞いた」

「……」

グラス越しに放たれた言葉にしばらく目を合わせて沈黙が続く。

「……あれ？　気付いてた？」

生ぬるい笑顔をダグラスに向け微かに顔を引きつらせる。

「もちろん」

薄笑いを浮かべソファの背もたれによりかかった。

「大抵の奴はベリルに近付きたくて俺に近づいてくるからね」

組んだ足はすらりと余裕をかますように揺れる。

「別に気にしてないよ。アキトとはいいい友人になれそうだ」

戸惑っている彼を一瞥し喉の奥から笑いを絞り出した。

「！　そか。良かった」

ベリルの弟子だからと近づいてくる人間の中にだってそういう出会いはある。そのきっかけの1つがベリルの弟子だったというだけだ。

アキトはベリルに会いたがったが、だからといって簡単に会わせるのもためらった。

「まあ、いつか会えるよ」

「そうだいいけどなあ」

同じ歳のアキトは日本人だけあってダグラスよりは若く見えた。赤茶けた髪は今のダグラスと似たように後ろ髪が少し長いためゴムでまとめている。

本人は知らない話だが、『神の愛で子』……ダグラスにはそんな面白い通り名が付けられていた。

これまでベリルが2年以上そばに置いて育てた者はダグラスただ1人なのだ。

そのせいかどうかは解らないが、人を小馬鹿にする態度は皆が納得してしまうほどである。しかし彼は憎まれる事もなく、むしろ可愛がられている。それだけの魅力を持っているのだらう。

*クラウド・ソラスの輝き

アキトと出会って数ヶ月後——イタリアでベリルと再会した。
イタリア共和国。サンマリノとヴァチカンの領土を取り囲んでいる南ヨーロッパに位置する共和制国家だ。

首都ローマから東にあるプーリア州の州都バーリで落ち合う事になっている。

ダグラスはベリルからの要請を受けた。それは一人前だと認めたうえで、事のなかダグラスには図りかねた。

「ベリル！」

軽く手を挙げて応えるベリルの姿が酷く懐かしく感じられた。出会った時と何一つ変わらない姿に安心する。

ソフトデニムのジーンズに黒いインナースーツ、その上にクリム色の前開きの半袖シャツを合わせた恰好だ。彼の影響でダグラスも下はカーゴパンツだが似たような恰好になった。

思えばダグラスは26歳、彼をすでに通り越していた……彼はその成長に目を細める。

初めて取り残されていく自分を感じたのはいつだったろうか——
本来ならば、それは衝撃的で耐え難い感情が生まれるのかもしれない。

しかし彼は、やはりただ素直にそれを受け入れていた。

そんなベリルを見ていれば、自然と周りもそれが普通なのだと思うようになる。あり得ない事なのに、当たり前のような感覚になるのが不思議だ。

「！」

ふと下に視線を落とすとベリルの隣に10歳ほどの少年が立っていた。彼の上着の裾を握りしめている。

「この子は？」

「案内役だ」

テロリストが潜伏しているとイタリア警察に情報が入り、その調査をしていた警察は有力な情報をこの少年から聞く事が出来た。

この件にどうしてベリルが依頼を受けたのか……そのテロリストの1人が厄介な相手らしいのだ。

「ナイトウォーカー？」

「ハンセン・モーゼル。以前に1度、会った事がある」

盗賊の俗称を『ナイトウォーカー』と言い、義賊は『リリパット』と呼ぶ。テロリストの中に、その盗賊がいるというのだ。ダグラスは渡された写真に目を通す。

短くカールしたブラウンの髪と浅黒い肌にくぼんだ黒い目は挑戦的に見える。

テロリストの潜伏先は路地裏のアパート。土地勘のある警察官たちでも、逃げられれば捕まえられる保証はない。

「……」

ダグラスは彼の足下にいる少年に視線を落とした。かなり懐いているようでベリルの服を離さない。

「……なんだよ」

苦笑いを浮かべるダグラスに睨みを利かせ警戒した。

「俺はダグラス。よろしく」

そんな風に何も考えずにすがりつけていたら……彼は少年が少し羨ましく思えた。そう思うと嫌がらせをしたくなる。

「言っておくけど彼は男だからね」

「あつたりまえじゃん。何言ってるの」

少年の目線に合わせ、かがんで発したダグラスに少年は呆れた声をあげる。ダグラスは“待ってました”とばかりに口の端をつり上げた。

「でも、“彼氏”がいるよ」

「!？」

「何を吹き込んでいる……」

聞こえた会話に当惑した顔を見せた。

「……ホントに？」

マジマジと見上げて問いかける少年に小さく笑う。

「生憎だが恋人は男も女もおらんよ」

「だから今が狙いどき」

笑顔で少年に右の人差し指を立てて念を押すようにゆっくりと応えた。

「ダゲ……」

「アッハッハッハッ」

それから少し離れて、高台で話を聞いているベリルを見つめる。

「！」

日差しが彼の短い金色の髪を照らし、それが神々しく見えた。

「クラウ……ソラス」

「！」

つぶやくような声に振り返ると、そこにいたのは仲間の1人だった。ダグラスよりも若干、若そうだ。顔立ちからして北欧の人間かもしれない。

「クク……」

同じ事を考えていた事に喉から絞り出すように笑った。

ベリルが黄金に輝く剣（ツバキ）のように見えたからだ。

『クラウ・ソラス』とはケルト神話のダーナ神族、ヌアザ王の剣の名である。鞘から抜くとその輝きに目が眩（くら）み、敵を両断するという『不敗の剣』。

仲間たちはそう成るために……そう在るために戦い続けているのかもしれない。そこには善か悪かじゃなく、ただ命があるだけだ。理不尽に蹂躪（じゅうりゃく）していく者たちから俺たちはその命を守るために自らを剣と成す——一際（ひととき）その中で輝きを放つ『光の剣』をみんなは目指す。

俺もそう成れるように彼の背中を追いかけていく。永遠に輝き続ける光の剣に手を伸ばす。

少しでも近付くために———どれが善か悪かなんて俺には解らないだから、自らの信じるものに従う他は無いんだ。

戦いは人の心は無惨に砕く。その中で正気を保ってられるようにするのは至難の業だ。例え砕かれた者がいたとしても……それを責める事は出来ない。

「ダゲ」

「！」

呼ばれてハツとした。

「行くぞ」

「うん」

高台から街を見下ろす。人々の営みがなんだか目にしみた。

「彼らを守るなら俺も上出来じゃないか」

口の中で発した。そしてベリルの後ろを追いかける。

——俺には3人の父がいる。

15歳まで育ててくれた名うての傭兵だったハミル・リンデンロ
ーブ……殺されかけたけどそれまで愛してくれた記憶は忘れない。

一度も会った事は無いけれど『流浪の天使』と呼ばれた俺の本当
の父クリア・セシエル……ベリルの盟友であり強い絆は決して断ち
切れない。

そして全てを受け入れる事を教えてくれた『素晴らしき傭兵』ベ
リル・レジデント……存在する事を拒もうとした俺を導いてくれた。
暗闇だった道の先。ともすれば足を踏み外しそうになる俺に手を
さしのべる。

ベリルにはまた新しい名が付けられるのだろう。

『クラウ・ソラス』

輝く神の剣——人はその心のままに突き進む事は難しい。彼はそ
の輝きで俺たちを導き続けてくれるだろうか。

俺たちも、その輝きに成れるように少しずつでもより良くしてい

かなければならない。

簡単な事じゃない。でも出来ない訳じゃない。出来ない訳がない……人の可能性を信じれば出来ない事じゃないだろう。

「無理だ」とあざ笑う奴がいても構わない。陽の光に背を向けていたって、まばゆい光は目に差し込んでくるのだから。

輝く剣に導かれダグラスは多くの人を救っていく事だろう。彼もまた、その輝きを受け継ぎ若き者たちを導いていく。

「……ベリル」

「ん？」

振り返った彼に口角をつりあげる。

「ベリルなら性別どころか、どんな年齢差だって許されると思うよ」

「……どういう意味だ」

「アッハッハッハッ！」

眉間に深い縦じわを刻んだベリルに大声で笑う。どこまでも晴れ渡る空にダグラスの声が響いた。

F i n

***クラウド・ソラスの輝き（後書き）**

*最後までお付き合いいただきありがとうございます。

今までの総集編としても書かせていただきました。

ダグラスの成長とベリルの心情——どれほど伝えられたかは解りませんが2人の絆は受け継がれていく……そう願っております。

*読んで下さった皆様が少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

2011・7・20 河野 る宇

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1463u/>

クラウ・ソラスの輝き

2011年8月30日03時25分発行